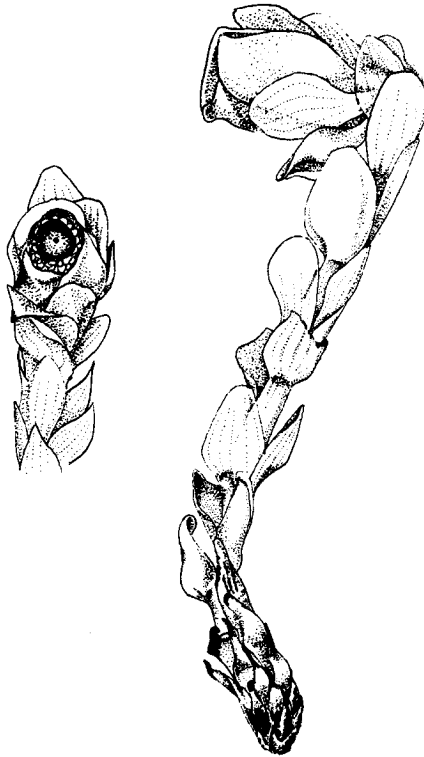


# まのせ

第10号



1973

鹿児島県立加世田高等学校  
生物部

〔 表 紙 説 明 〕

ギンリョウソウ *Monotropastrum globosum* H. Anders.

(イチャクソウ科)

山林中落葉などの腐植土に富んだ陰地に見かける腐生植物で、5月頃茎頂に横向きの1花を開く。

昔、竹馬車と呼んでいた草は、このギンリョウソウやナンバンギセル(秋日開花の別科の寄生植物)のことであった。なるほど花をつけた草の姿が、子供達が乗ってかけ廻って遊ぶたけうまの形に似ているようだ。

日本全土に分布するが、加世田付近では長屋山、磯間山などに見られる。図は、金峰山産で、宮原康展君の画いたもの。



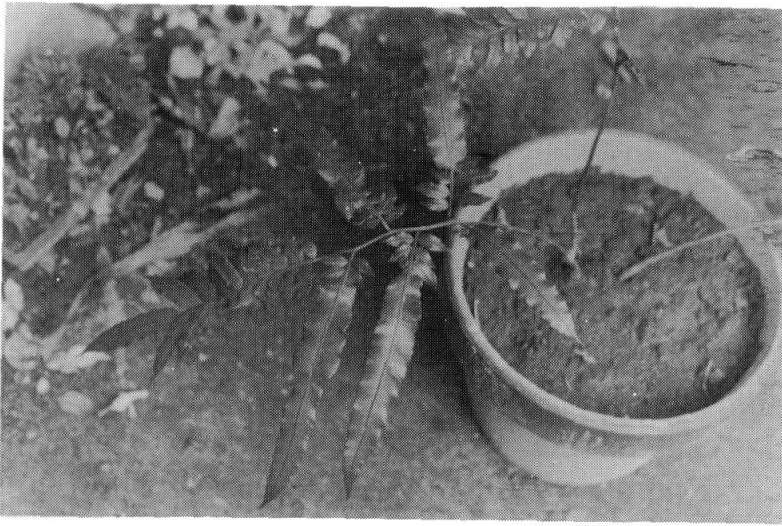
1. 飼料のアオキ (P.36)



2. オキナグサ (P.36)



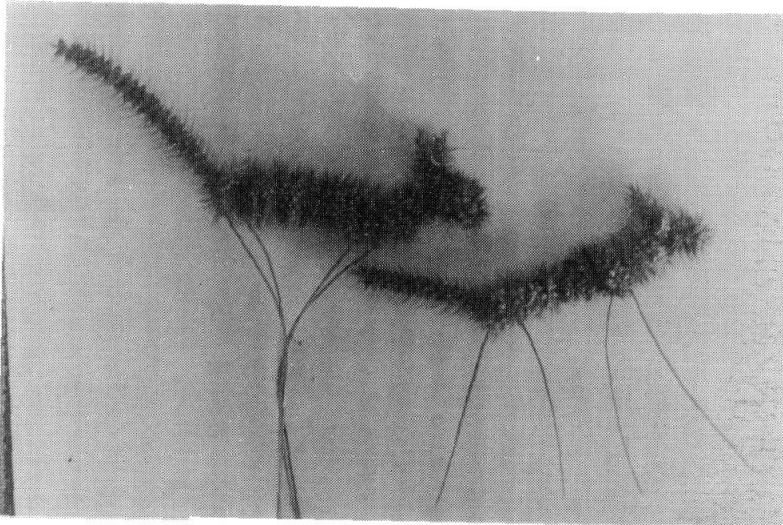
3. 八瀬尾採集会 (P.31)



4. カワリバリョウビンタイ (P.38)



5. ツマベニチョウの蛹 (ギョボク葉裏)  
(P.24)



6. エノコログサで作ったイヌコロ (P.38)

目 次

---

ネムの木に来るアゲハチョウ(第5報)---(2年)	唐仁原俊哉-----2
ツマベニチョウの飼育----- (2年)	唐仁原俊哉-----6
1972年ネムの木の落花と結実数----- (2年)	弥勒菜穂子-----7
ネムの木のサヤの大きさと種子数の変異---(2年)	安富 朱美-----9
1972年トウモロコシのキセニア観察--(2年)	唐仁原俊哉-----11
野間岳の岩石類----- (2年)	安富 朱美-----15
造網性の蜘蛛について----- (2年)	前田 明子----16
ナタマメの葉成長観察----- (2年)	東 康子----19
秋目採集記----- (2年)	唐仁原俊哉----24
ツマベニチョウを求めて----- (2年)	唐仁原俊哉----25
1972年の迷蝶記録----- (2年)	唐仁原俊哉----26
加世田周辺の地質構造について----- (2年)	安富 朱美----27
第1回採集会 ― 亀ヶ丘 ― ----- (2年)	南 洋子----30
第2回採集会 ― 八瀬尾 ― ----- (2年)	東 康子----31
― 蝶採集記 ― ----- (2年)	唐仁原俊哉----34
― シダ採集記 ― ----- (1年)	福元 絹代----35
第3回採集会 ― 野間岳 ----- (2年)	南 洋子----37
第4回採集会 ― 川辺町・禿どん山 ----- (2年)	南 洋子----41
― 昆虫採集記 ― ----- (2年)	唐仁原俊哉----42
第5回採集会 ― 金峰山 ― ----- (2年)	南 洋子----43
第6回採集会 ― 八重山 ― ----- (2年)	南 洋子----44
第7回採集会 ― 池底 ― ----- (2年)	弥勒菜穂子----45
園芸メモ(1972年度)----- (1年)	鮫島 泉----47
生物部日記より ― 花ごよみ ― ----- (1年)	鮫島 泉----49
生物部員名簿-----	-----51
俗説薩隅植物誌(5)----- (顧問)	佐方 敏男
1972年度採集種子植物目録-----	生物部

## ネムノキに飛来するアゲハチョウ（第5報）

2年 唐仁原 俊哉

今年もネムノキに薄桃色の花のさきはじめて6月15日、一昨年に引き続いて、ネムノキに飛来するアゲハチョウ類について観察をはじめた。昨年やっていたので、わからない所など多かったけど、先輩に聞いたり前回の記録など引き出して下記のようにまとめてみた。毎日、朝、昼、夕方と3回かかさずやるということは、なかなかむずかしく、根気のいる仕事で、日曜日など観察できず記録もれしたことや、蝶の多く集った日など数えるのが困難で、不正確な点もみられるのが残念である。目的は前回と同じく次のようである。

- ① 本年度の各アゲハチョウ類の発生個体数の要を知り前回のものと比較してみる。
- ② 本年度の各アゲハチョウ類の発生個体数割合より、どのようなアゲハチョウ類がもっとも加世田市近郊に多いか調べる。
- ③ 各アゲハチョウ類の飛来数より発生時期を調べる。
- ④ 朝・昼・夕方の時間の違い、天候の変化などの違いやその他のことから、飛来個体数がどのように変化するか、その変化の原因は何かを調べ、その習性を検討してみる。

また観察方法は前回のものと同じくし、よりできるようにした。ただしこれらの記録は、校内のネムノキに飛来する記録からの推測であることをつけ加えておく。

### <観察方法>

- 期間 1972年 6月15日～7月10日
- 観察時間 [A] 8:30～8:35  
[B] 13:00～13:05  
[C] 16:50～16:55 以上各時間とも5分間ずつ。
- 手段 ネムノキの花に飛来したアゲハチョウ類を肉眼または双眼鏡で観察する。

### <観察対象アゲハチョウ>

- アゲハ
- ジャコウアゲハ
- クロアゲハ
- ナガサキアゲハ
- モンキアゲハ

なおその他のアゲハチョウ（アオスジアゲハなど）は前回までの記録がないので、比較できないために除外した。

(第一図)

ABC各時間におけるアゲハチョウの飛来数

月 日		15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計	総計	
天 気	A																													
	B																													
	C																													
アゲハ	A		4			9	24	5		10		7	1	3	1	1	0						4	4				73		
	B		2			23	22	3	13	34		3	4	4	1	1	1						4	0				115	254	
	C		5			32	6		5			6	1	5		0	2	2				1	1					66		
ジャコウ	A						3	3		6			4	1	1	0						2	2		1		23			
	B						6		2	13		3	3		0	1						1	2	1			36	80		
	C						2	1	2			1	2	4		1	0	3	3			1	1				21			
ク ロ	A						5															1	1		1		116			
	B						4	5	1	2	6		2		2									1			23	58		
	C						8	2		2			1	1	1			2	2								19			
ナガサキ	A						2	0		4			1		2												9			
	B						4			6		1	0									2					13	30		
	C						2	1	1			1	1				1	1									8			
モ ン キ	A						2	5																			7			
	B						1	2	3				2											1			9	21		
	C						3	0		2																	5			
合 計			11			1	85	89	14	28	87		26	13	29	4	6	2	8	8		10	10	10		2				

○ 前回はABCの各時間に関しての気温を計っていたが、今回はあとで気がついた時はすでに遅く、ABCの各時における気温変化が見られなくて残念であった。

だがその日における平均気温(枕崎測候所記録)をつけ加えておく。

€

< 1 > 本年度の各アゲハチョウ類の6～7月にかけての発生個体数の概要と前回との比較

	1972年度	1970年度	1969年度	1967年度
アゲハ	254頭	256頭	102頭	124頭
ジャコウアゲハ	80	126	124	43
クロアゲハ	58	24	14	48
ナガサキアゲハ	30	5	28	15
モンキアゲハ	21	5	5	10

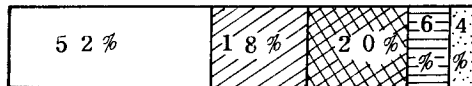
〔考察〕

ナガサキアゲハ、クロアゲハ、モンキアゲハの飛来が伸びてきた。記録のあやまりも少しはあったかもしれないが、増えてきたということは、認めざるを得ない事実である。

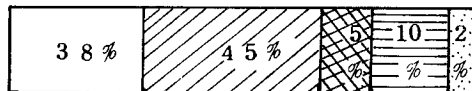
ジャコウアゲハは減少したけれども、観察時間以外にも多くの飛来を認めているし、どこでも多く見られるので、安定した発生をしていると考えられる。

< 2 > 各年度における種類別飛来数割合

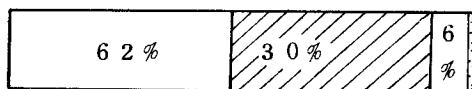
(第二図) 1967年(総飛来数 240頭)



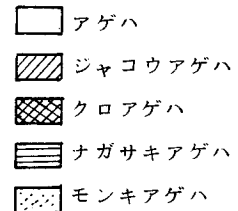
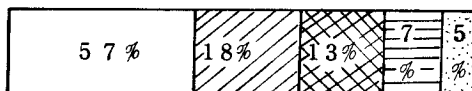
1969年(総飛来数 273頭)



1970年(総飛来数 416頭)



1972年(総飛来数 443頭)



〔考察〕

前回まではナミアゲハ、ジャコウアゲハの占める割合が大変多かったけれども、今年は割合の上から考えると減少しているが、採集会に行った時や、通学途中などで最もよく見かけるのが、この二種で、数が減ったとは考えられない。クロアゲハ、ナガサキアゲハ、モンキアゲハの三種は例年になく、多数発生したものと見られる。このほか記録はとらなかったけど、アオスジアゲハの飛来がめだっている。なお加世田地方には、これらのアゲハの他に、キアゲハ、カラスアゲハ、ミカドアゲハなどの種類が分布している。



<3> 各アゲハチョウの飛来数による発生時期

この件は飛来数が天候によってかなり左右されるために、次期発生時期を決めるのは、不可能であるかもしれないが、しかし最初に書いた<第一図>から推察すると大体7月下旬より8月中旬にかけてが最も多いだろう。しかし絶対とは言えない。

だが、飛来数がアゲハとジャコウアゲハではほぼ7割5分を占めているので他のアゲハチョウ類のそれとは、かなりずれる面もあると思う。

<4> 飛来個体数の変動について

- ・時間（A, B, C）における違い

（第三図）

年 時間	アゲハ			ジャコウ			ク ロ			ナガサキ			モンキ		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
1972年	73	115	66	23	36	21	6	23	19	9	13	8	7	9	5
1970年	75	95	86	40	39	47	8	12	4	3	1	1	4	1	0
1969年	42	39	21	45	31	48	7	5	2	14	9	5	2	2	1
1967年	32	58	39	5	14	23	3	16	29	4	4	5	3	3	4

- ・天候における違い

第一図よりどのアゲハも共通して、雨天の日は飛来数が激減するようである。また、風、気温にも影響するものと思われる。

- ・雌雄の別は、はっきりしないが、ナガサキアゲハにおいては雌の方がよく吸蜜していた。

（反省）

1日3回5分間ずつ頭数を数えるのは、めんどくさく、なみたいていのことではなかった。一応やりとげたけれども、ところどころ記録もれがあるのは残念であった。

内容は前回のもと同じようで、今年のものをつけ加えたにすぎず、また気温の変化をつかめず内容としては、不満足なものに終わってしまって、心残りがしている。

今年で5年目で資料も多くなったので、来年もつづけて、今まで試みたことのなかった点など深く追求し研究してもらいたい。

## ツマベニチョウの飼育

2年 唐仁原 俊 哉

5月末に木佐貫、浜川両先輩の採集してきたツマベニチョウの卵。私が6月4日、24日に採集してきた卵と幼虫の飼育について記録してみた。これらの卵、幼虫は、すべて秋目で採集したものである。下記のとおりの方法で5頭について観察した。

A：5月末……………採集してきた卵

B：6月4日…………… “ “

C：6月4日…………… “ 2令幼虫

D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>：6月24日… 孵化したばかりの幼虫

<食 草>……………ギョボクの葉

<観察場所>……………A, B：鉢植えのギョボクで飼育（生物準備室内）

C：花びんにさしたギョボクの葉（自宅室内）

D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>：地植えのギョボク（温室内）

種別	発生経過	孵化	2令	3令	4令	終令	蛹化(前)	蛹化(完)	羽化	雌雄別
A		6/1	6/6	6/10	6/16	6/18	6/21	6/22	7/2	♂
B		6/7	6/11	行方不明						
C				6/10	6月12日死亡					
D <sub>1</sub>			6/28	6/30	7/1	7/3	7/4	7/5	7/16	♂
D <sub>2</sub>			6/28	6/30	7/1	7/2	7/5	7/6	7/17	♂

Bにおいては、順調に成長しつつあったが、6月13日あたりから見えなくなった。付近をよくさがしたが見つからなかった。残念であった。

またCにおいては、6月12日死亡してしまった。原因は、食草が古くて、しおれていたということと、観察場所が、風通しが悪くじめじめしていたためと考えられる。

A, D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>については、雄の傾向が現われたのは、羽化の2, 3日前からで、羽根となる部分に赤みがさしてきていた。また、これらの3頭に共通して言えることは、3頭とも羽根が弱かったことであった。羽化後数時間たっても、自然のチョウのように勇壮に飛ぶことができなかった。

温室で育ったD<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>は、Aに比べて成長が早かった。温室内が暖かったからであろう。

反省としては、それぞれの場所における気温の変化を記録しておかなかったのが残念であった。また次回は、食べた食草の量なども記録してほしい。

## 1972年ネムの木の落花と結実数

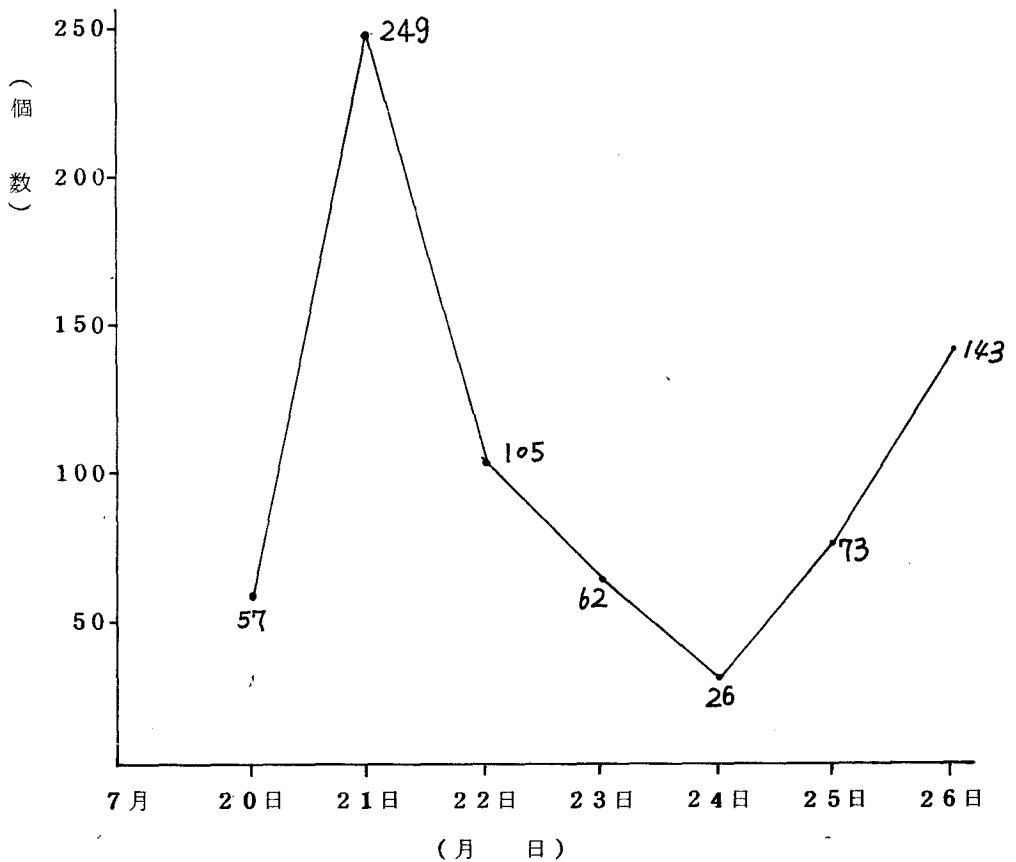
2年 弥 勒 菜穂子 外

この調査は、今回で4回目である。今回は1日当りの落下花序数、それに結実の数をかぞえるだけにした。

調査は6月17日から7月28日まで42日間で、落花序本数は11万本以上で、結実した果実が725本で、結果率0.62%である。そのうち、落下した日がわかっているのは114524本で、このうちわけは次頁のグラフのとおりである。今年は去年に比べて、調査期間が短かく、調査協力人員も少なかったので満足な結果が得られなかった。

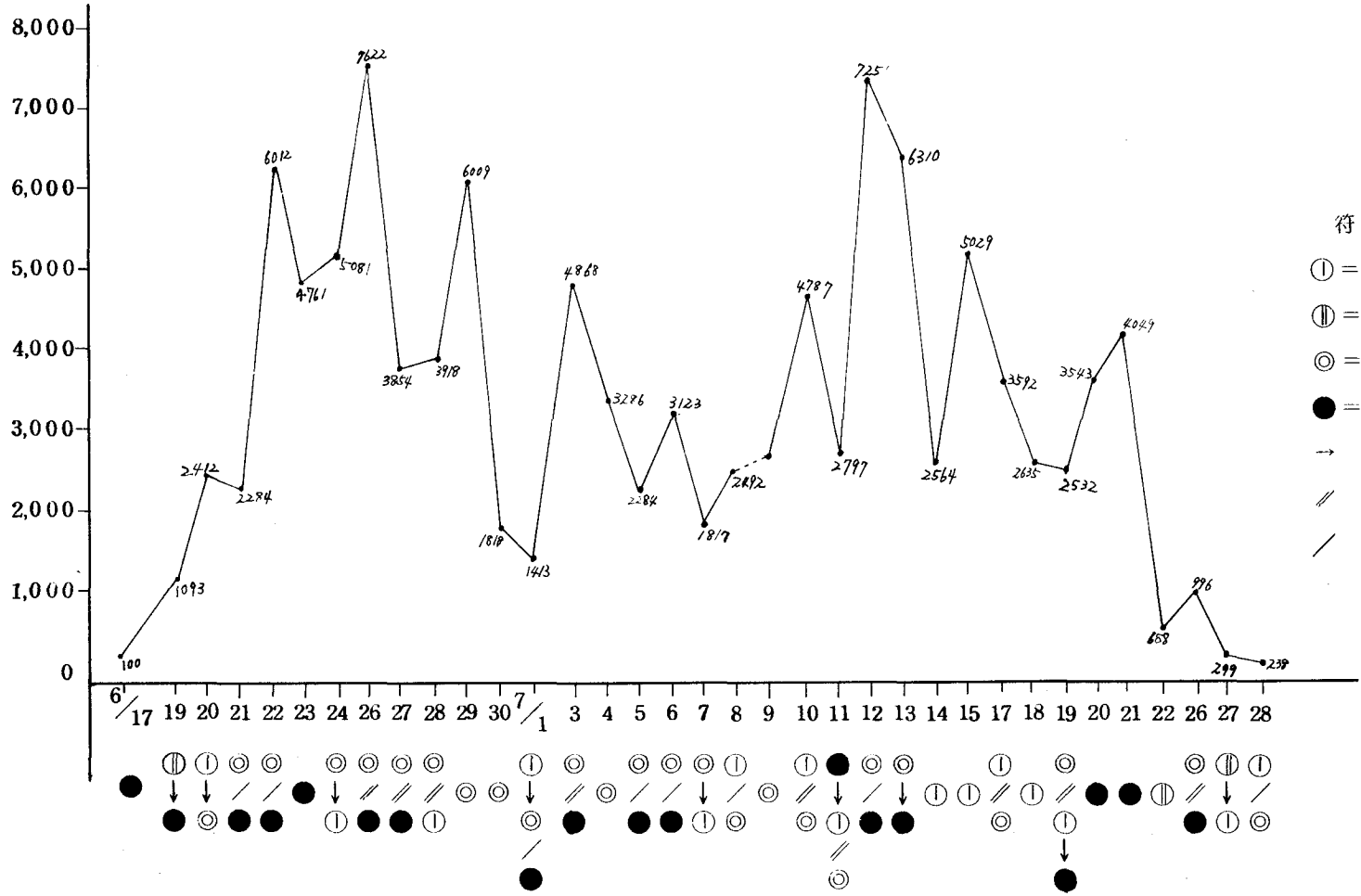
なお、この期間中の気象資料は、枕崎測候所よりいただいた。同所、木佐貫淳主任の好意に厚くお礼申しあげたい。

ネムノキ落果数調べ(1972)



ネムの落花数調べ (1972)

— 8 —

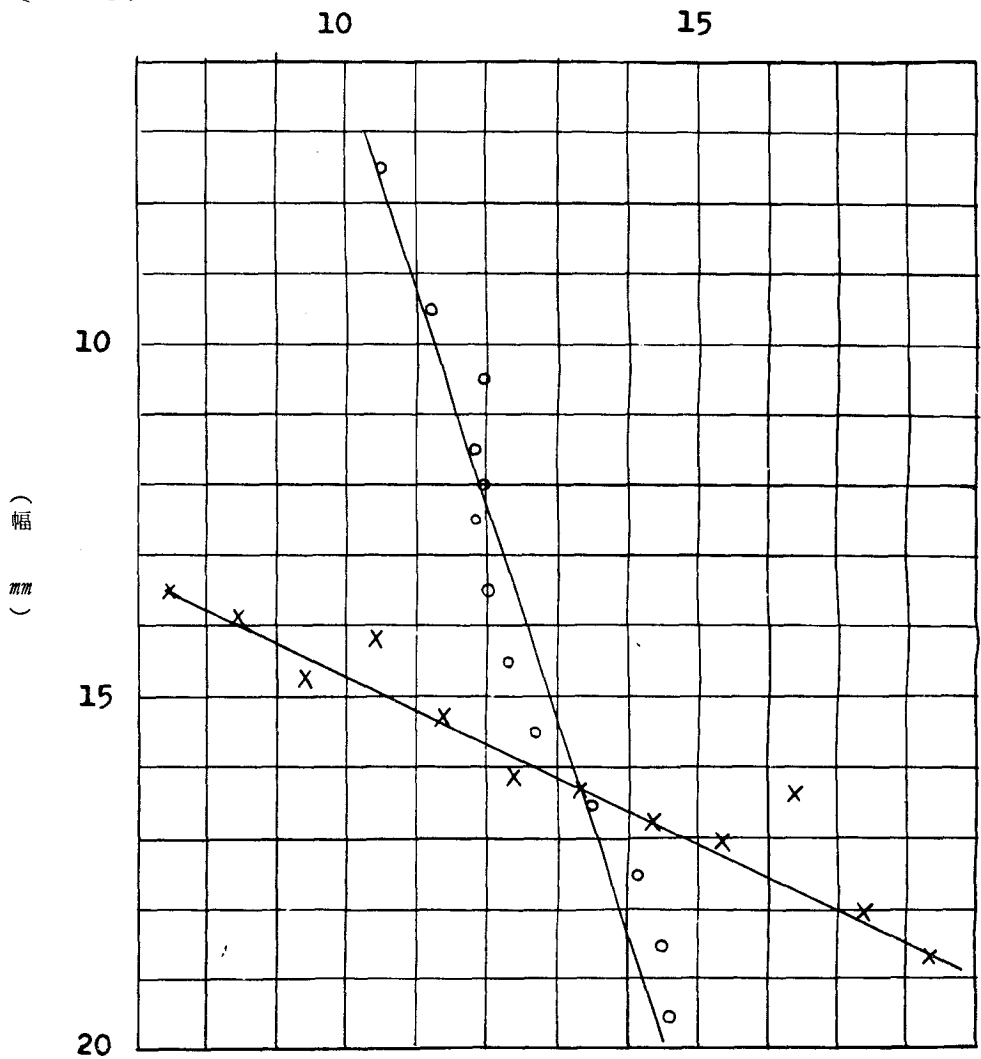


# ネムノキのさやの大きさと種子数の変異について

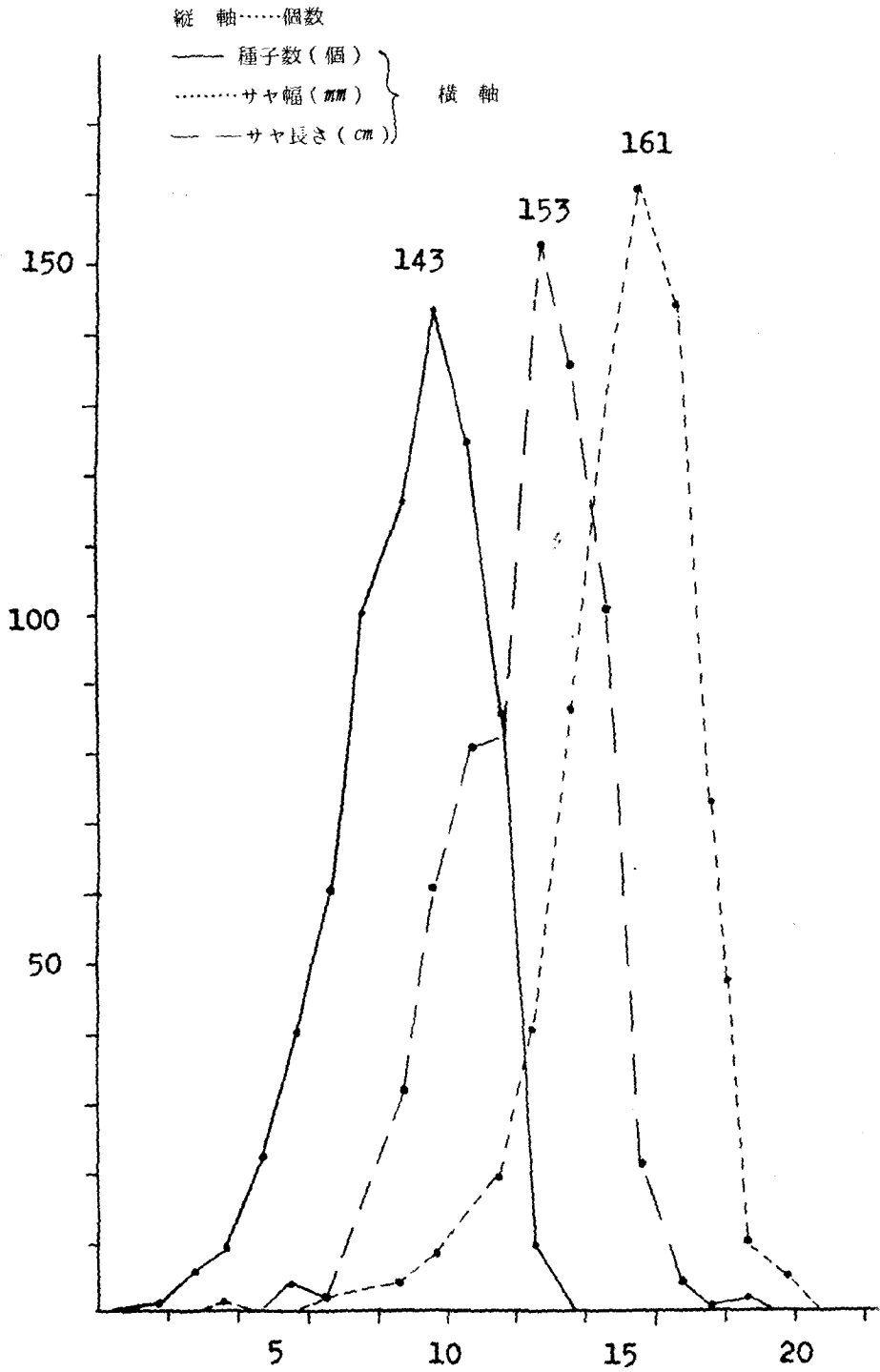
2年 安富朱美

昭和46年ネムの結実調査途中、8月6日の台風15号のため落下した未熟のさや果781個について長さ、巾、さや内の種子数の変異とさやの長さとの相関関係を調べてグラフにまとめてみた。その結果はつぎの通りであった。〔グラフI, II〕

〔グラフI〕 (長さ cm)



[ グラフ Ⅱ ]



# 1972年トウモロコシのキセニア観察

2年 唐仁原 俊 哉

本校生物部でトウモロコシのキセニアの観察について、前に「まのせ」2号および3号において発表しているが、今回はキセニアにおいて両性雑種の観察に好都合な品種が得られたので、交配実験してみることにした。(両品種は長野県農業試験場梗ヶ原分場の好意によって分譲されたもの)

- I (1) 品種名 **White Flint** (白 平滑) (長品230)  
**Black Mexican** (紫黒 しわ)

(2) 方法

- (イ) 実験地……本校校舎第4棟、第5棟の中庭の花壇(調理室横)  
(ロ) 播種期……**W・F** 5月27日  
**B・R・M** 6月6日  
(ハ) 播種方法……両品種を約30cm間隔に一種ずつ交互におく。  
白の雄花穂は抽出前にすべて抜きすてる。  
(ニ) 肥料……硫安・塩化カリ

II 調査の成績

(1)

品 種	播種期日	発 芽 日	♂出穂期	♀絹糸抽出期
W・F	5・27	6・3	7・14	7・24
B・M	6・6	6・12	7・17	7・24

- (2) 生育状況……両品種ともに順調な発育をした。(次頁参照)  
(3) 結実状況とキセニアの出現程度

- ：半分以上結実しているもの  
△：半分以下結実しているもの  
×：まったく結実していないもの

III 結 論

- (1) 風媒によりwhite種の絹糸(♀の柱頭)に、Black種の♂の花粉がつき、自然交雑が起こると、色についてみると白種のトウモロコシは、白種にならず黒い色がついてしまうから、色の変化から交雑の成功したことがわかる。しかし、形においては、なめらかな白種のままである。

♀花着生位置

結実花粒色  
果

同右 %

株番号	株種類	節数	草丈cm	2節	3節	4節	5節	6節	7節	白個	紫黒個	白%	紫黒%
1	W	9	68					○		23	31	42.6	57.4
2	B	6	55			×	×						
3	W	8	40					○		19	33	36.5	63.5
4	W	10	62						○	10	13	43.5	56.5
5	B	6	40				○			9	13	40.	60
6	W	9	75				○			25	143	14.9	85.1
7	B	8	51.5			○					68		100
8	W	9	84					○		93	94	49.7	50.3
9	B	9	55				×						
10	W	8	87					○		29	53	35.4	64.6
11	B	8	52				○				19		100.
12	W	10	84					○		69	61	53.1	46.9
13	W	8	57					○		96	97	49.7	50.3
14	B	9	59			××△				3	15	16.7	83.3
15	W	9	61.5					○		101	134	43.0	57.0
16	B	8	50				○			14	39	26.4	93.6
17	W	10	90.5				×	○		31	43	41.9	58.1
18	B	8	60					○		13	132	9.0	91.0
19	B	10	98		△	×△	△	△×					
20	B	9	59			△					1		
21	W	9	92					○		11	159	6.5	93.5
22	B	8	60			○				2	115	1.7	98.3
23	B	7	40	×	×	×							
24	W	7	55			△	×	×					
25	B	9	36				×	×					
28	W	8	57		×			○		10	9	52.6	47.4
29	?	8	61		×	×							9
30	W	11	85					×	○	1	15	6.2	93.8



(2) <W・Fにおいて>

♀花穂は大体、第4節から第6節に1～2個であるが上方の第6節にできるものがほとんど良く結実している。

トウモロコシは上方から順に雌花をつけていくので、下方の雌花ができた頃には黒の♂穂との花粉形成が不十分であったためらしい。

(3) <B・Mにおいて>

♀花穂は大体、第4節から第6節に2～3個ほどでたが、やはり第6節にできたものが、よく結実している。その結実株の中に、白色のしわ型粒が少数ながらみられたのは意外に思われた。(例えば、14, 16, 18番株など)

また、W・F株にキセニアのあらわれていないものが多数あったが、これは、トウモロコシが風媒花であり、又、トウモロコシの白、しわが劣性形質なので、学校付近のトウモロコシの花粉が、風に運ばれてついたことによる<sup>√</sup><sub>の</sub>であろう。

来年はこのF<sub>1</sub>を用いてF<sub>2</sub>の調査を行ないたいと思う。



トウモロコシ  
(品種ブラックイヤシカン)



トウモロコシ (品種ホワイトフリント)

White Flint  
6. 30-'72  
6. 20掲 宮原

## 野間岳の岩石類

2年 安富朱美

生物部キャンプが野間岳中腹の野間神社の境内であり、部員数名と共に参加したが、岩石調査班は私が1人だけで、たいへん心細かった。

仁王崎でバスを下車し、植物班の人たちと一緒にさっそく採集をはじめた。

最初、花崗斑岩の露頭にぶつかり、そこから野間岳の登山口の椎ノ木部落のあたりまでは、主に砂岩と溶結凝灰岩の小さな露頭があった。しかし山すその畑作地帯は大部分が溶結凝灰岩であり、登山道路の両わきには大きな溶結凝灰岩を利用し、石垣が作られていた。

山の中腹まで砂岩優勢の頁岩との互層が続き、それからは安山岩が続いていたが、途中、高さ10メートル程の砂岩の露頭があり、その下方に、固くて白っぽい班状組織の岩石がみられた。たぶんリパライトだったと思う。

頂上まで安山岩だったが、ほぼ3種類に分類され、それぞれの特徴から野間岳に3度以上の爆発があったことを示している。安山岩の露頭は変化にとんでおり、板状節理や捕獲岩がみられた。

中でも捕獲岩は大小さまざまな砂岩、泥岩などの岩片であり、また安山岩は新鮮で、角閃石や輝石などが、肉眼でみとめられた。また所によっては角礫凝灰岩の露頭もあり角礫の玉ねぎ状構造がよく観察できた。

檜ノ木山のあたりから地図上の道と、実際の道路の位置が違っていたために途中で手前の小高い山と野間岳の頂上、女岳の頂上の三点から観測地点を知る測量法を教わったが、あまり自信がなかった。

2日目は野間神社から頂上へ向って出発した。岩石はずっと安山岩だったが、かなり黒っぽい輝石安山岩だと思われる。しかし実際のところ、落ち着いて岩石を観察したのは頂上だけで、登る途中は体をひきずっていくのがやっとなかった。頂上からシダの採集に植物班と一緒に50メートル程下ったところに安山岩の大きな崖が5ヶ所くらいあった。岩から眺めた海はすばらしく、このキャンプに参加してほんとうによかったと思う。私にとっても部員のみんなにとっても今年最大の収穫であり、思い出になったのではないかと思う。

# 造網性のクモ（蜘蛛）について

2年2組 前田明子

クモの巣、クモの網 「どっちでもたいした違いはない。同じだ」と考える人が多いが、両方とも違う。クモが昆虫をつかまえるために張るのは、網。一般には、その網のことを“クモの巣”という。でもこれはまちがった呼び方です。ほとんどの人が、クモの巣と網を同じものと混同して考えているのが実状です。クモの網を見ていると実にいろいろな網がある。また、そのクモ自体においても、めずらしい習性を持つ者もいる。これから書くことは、加世田高校、加世田の竹田神社、阿多、そして私が行った所々で観察したものです。

発見場所は、加世田高校は 加、竹田神社は 竹、阿多は 阿、万世は 万、小湊は 小、野間池は 野と略号する。 <sup>間</sup>池

## 1. コガネグモ

一般に最もよく見られるクモである。コガネグモ科コガネグモ属に属する。このコガネグモ属の習性として、体にふれると脚をつっぱり網を前後にゆりうごかし身を守る習性がある。この習性は、他の造網性のクモに多くみられる習性です。

コガネグモは最も普通は種で、初夏に現われ、だいたい8月末になるとだいぶ少なくなる。中でも、早いものになると、3月の終りごろに現われるものもいる。今年最初に見つけたのは、2月の半ばごろ、平地の木の繁った影まったところに、コガネグモ特有の網を張っていた。3月の末になって、チュウガタコガネグモ、コガタコガネグモ、シロカネグモといったクモが、チラホラ出現し初めた。これらのクモは、完全円網を張る。そして、円網の中央に、おびの典型ともいうべき白いX字状のおび（かくれおびと呼ばれる）をつけ、~~そのたびに~~、脚を2本ずつそろえてとまる。そしてこの種のクモの網は、おもに明方にかけて作られる。（加、竹、阿、万）

## 2. オニグモ

オニグモは、オニグモ属に属する。このクモは地方によって「ダイミョウグモ」とも呼ばれたりしている。腹部の前方両肩に2つの突起があって、いかにもダイミョウといった感じのするクモである。このクモの成熟は、7～8月頃、出現は早いので、5月末に、樹幹や軒下に網を張っている。このクモの種類のはほとんどは、夕方網を張り、朝になると網をたたみ、また夕方だいたい暗くなるころ、せっせと網を張り初める。そしてこれを毎日くりかえす習性を持っている。ある条件によっては、1日中、網を張っているのを見かけることもある。（加、竹、阿、万、小、野）

## 3. ヤマシロオニグモ、ドヨウオニグモ、イエオニグモ

これらは、コガネグモ科 ヒメオニグモ属に属する。ヤマシロオニグモは、中大のクモ、5-6月にはすでにグロテスクな姿をあらわし活動を野外の樹間に開始する。ドヨウオニグモは、水田に多く見られ、腹背が黄色のため稲とかかわらず目立たない。年に2回（夏、秋の土用頃）発生する。今年は5月の初めに学校の花壇に網を張っていた。かわいそうだったけど、クモ第1号として採集した。イエオニグモは、その名の通り、人家の軒下や天井などに多く円網を張る。このクモは、新しく円網を張る直前に古い網を破壊する。他にあまり類のない習性である。だいたいいつでもいるクモだ。（加、竹、野、万）

#### 4. スズミグモ

これもやはりコガネグモ科であり、属はスズミグモ属、スズミグモの網は、ドームまたは水平網で下にも多数の糸を引く。(1)他のクモと違うところは、主網が小さい正方形で構成されていて色に粒球がないということだ。♀の網はドーム型で非常に大きいとそれと比べると、♂の網は、やはりドーム状ではあるが、小さい網を葉うらなどに作る。場所は、日当りのよい樹間に作る。（竹、野）

#### 5. ゴミグモ

コガネグモ科、ゴミグモ属 このクモも少しかわっている。円網を張るのは他のクモと少しもかわらないが、食べかすやふん、脱殻・卵のうなどを縦に重ね、クモは敵から身を守るために、そのいわゆるゴミの中に隠れる。手で触れると、地上にころげおちるようにして逃げる。しばらくは、足をちぢめて動かない。その場合に網から命網ともいうべき、しおり糸を引くことを忘れない。4月の半ばころから出現します。日当りのよい樹間に張る。（加、阿、万、野）

#### 6. ヨシデゴミグモ

ゴミグモ科、属ともに同じ。形態的には前記のゴミグモと異なる。特に異なった点といえば、円網はかわらないが、その円網にあらい渦巻状の白いかくれおびをつける。ただしこのかくれおびは、円網の途中からつけている。5月初めに加世田の竹田神社にて採集。（竹、小）

#### 7. ジョロウグモ

コガネグモ科、ジョロウグモ属 一見して明瞭、黄と緑青色の荒い横縞がある。秋に成熟し、複雑な三重網を張る。横糸は五線紙状で数本毎に足場糸の残りが見られる。糸は他のクモの糸に比べて非常に強く、唯一の金色をした糸を持つ。夏の終り頃出現する♂は大きいと、秋もおそく出る♂は比較的小さい。10-11月頃山中に入ると、樹間はどこを見てもジョロウグモばかりであるこのクモは、同じ網に小さな♂、1-2頭多いときで5-6頭も同居している。一夫多妻ならぬ一妻多夫である。（加、阿、竹）

## 8. シリサラグモ

サラグモ科，サラグモ属に属する。サラグモ属は，割合に大きい皿状あるいは碗状の網を張る。細分では，いくつかの属に分かれる。シリサラグモは，山地で普通に見られる種で，樹間の梢にいたるところに上向きはやゝ深い大きい皿網を作る。（加，阿，野）

## 9. ネコハグモ

ハグモ科，ハグモ属 この種のクモは，葉上生活をなす。いろいろの葉のうらなどに天幕をはりその下にひそむ小型のクモで，5月頃から出現し初める。そして，6～7月頃成熟する。冬は体を糸で包み葉の間で天幕の中ですぐす。暖い日は出てきて活動をするが，ほとんど天幕の中にいることが多い。（加，阿，万，小）

## 10. オウギグモ

ウズグモ科，オウギグモ属 山間や低木のうす暗い場所に三角形の網を張る。三角形の網の頂点から引かれた一本の糸の端に糸をたぐりよせて静止，獲物がかかると糸をはじき，また，たぐった糸を急にはなし前方へ突進して獲物をとらえる。網の張り方は円網の手順とかわらない。このオウギ状の三角網は，円網の変形。（竹，野）

## 11. ウズグモ

ウズグモ科，ウズグモ属 このクモは郊外，山地の日かげ，あるいは湿地帯の日かげにみられる。ごく小さなクモであるが一般には大きさや色彩に変異が多く種々の段階が見られる。網は水平円網で，日かげに張り中央にかくれおびをつける。この白いかくれおびは渦巻状のもの，一筋のまっすぐなものなど個体によりいろいろ異なる。早くは5月末から現われ初め，10～11月頃までまだいるのもある。（阿，竹，野）

## 12. クサグモ

タナグモ科，クサグモ属 平地から山地にかけて現われ，普通樹間，生垣の間に奥に漏斗状（トンネル状）住居をもつ棚網を張る。棚網の上部には多くの糸が引かれ，一たびこれに入りこんだ昆虫はぜったいに逃げられない。この棚網は大きいになると50～80 cmの網を張るクモもいる。（Ⅱ）8月頃成熟し多面体の卵のうを作り，親は卵のうをはなれずに保護する。秋にふ化し幼生で越冬する。（加，竹，阿，万，小，野）

造網性のクモは他にまだいっぱいいる。ここにあげたのはそれらのほんの一部にすぎないほんの一部のことで少しでも皆の目にわたっていただけたらと思う。

引用文献 （Ⅰ）（Ⅱ）保育社 原色日本蜘蛛類大図鑑

# ナタマメ（刀豆）の成長について

2年 東 康 子

ナタマメのさやは30 cm位もある長大なものでナタの形に似ている。種子（マメ）から、はじめて結晶酵素としてウレアーゼがとり出されたのでも有名である。そして発芽後の成長がはやいことも興味をひいたので、第1本葉の開葉後数日間、その葉やつるの成長について測定調査してみた。なおはじめに鉢植（直径20 cm）した1本は子葉を1枚だけ除去し、他の1本の苗は完全子葉のままとして比較観察した。

1. 本葉第1葉の成長面積測定の結果はつぎの通りであった。（表1，図I，II）

（表1） ナタマメの第一葉の成長表（面積mm<sup>2</sup>）

完全子葉		月/日	1, 1枚子葉	
右	左		右	左
1503	—	7/7	1449	—
3303	—	7/8	2781	—
9126	9693	7/10	7451	7902
11331	11889	7/11	8262	8334
13328	14472	7/12	9873	11520
14994	16785	7/14	11888	12231
18107	18958	7/15	13644	14004
20736	21717	7/16	14562	14733
21348	22392	7/17	14945	15499
22492	—	7/18	16848	—

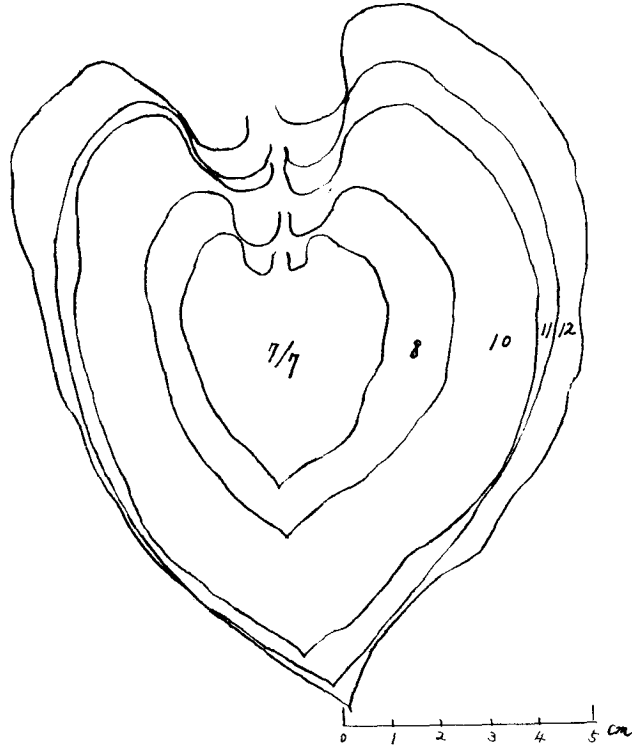
※ 「右」とは、苗の図①の時の外側の葉をいう。

2. 発芽初期のつるの成長はつぎの通りであった。（表2，図III～V）

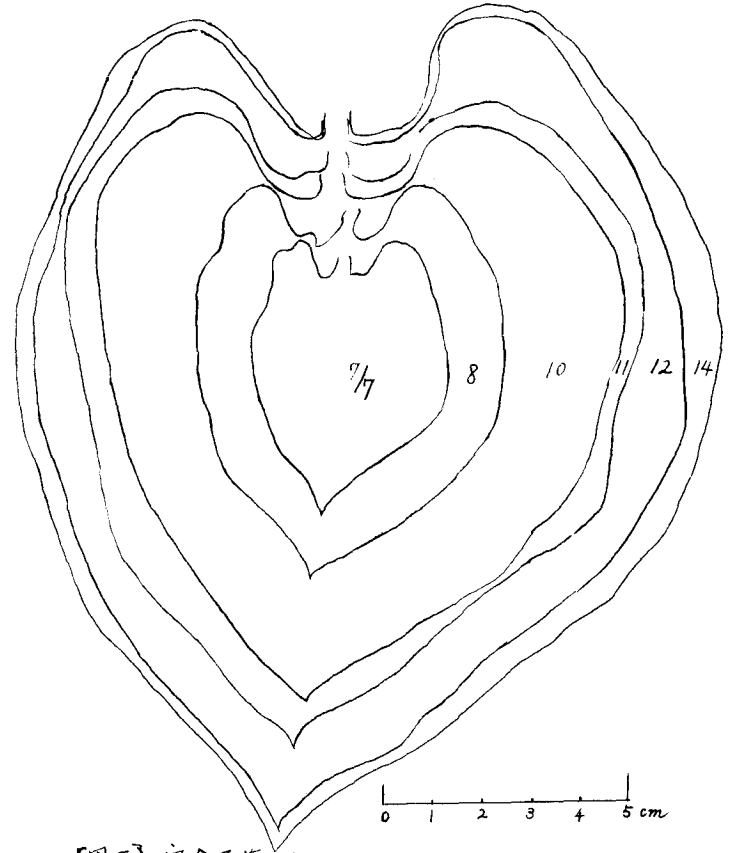
子葉は、緑色のかたい物から黄色いしわの多いものになり15日前後にすべて落ちてしまった。図IIIからみてわかるようにちょうど15日前後の2本のつるの成長の差は、いちじるしい。

（表2）（単位—cm）

子葉	7/12日	11日	12日	13日	14日	15日	16日	18日	19日	21日
1枚	18.0	21.0	22.0	23.5	29.0	34.0	44.0	61.0	69.0	87.0
完全	24.5	30.0	32.0	35.0	42.0	48.5	54.0	66.0	76.0	94.0



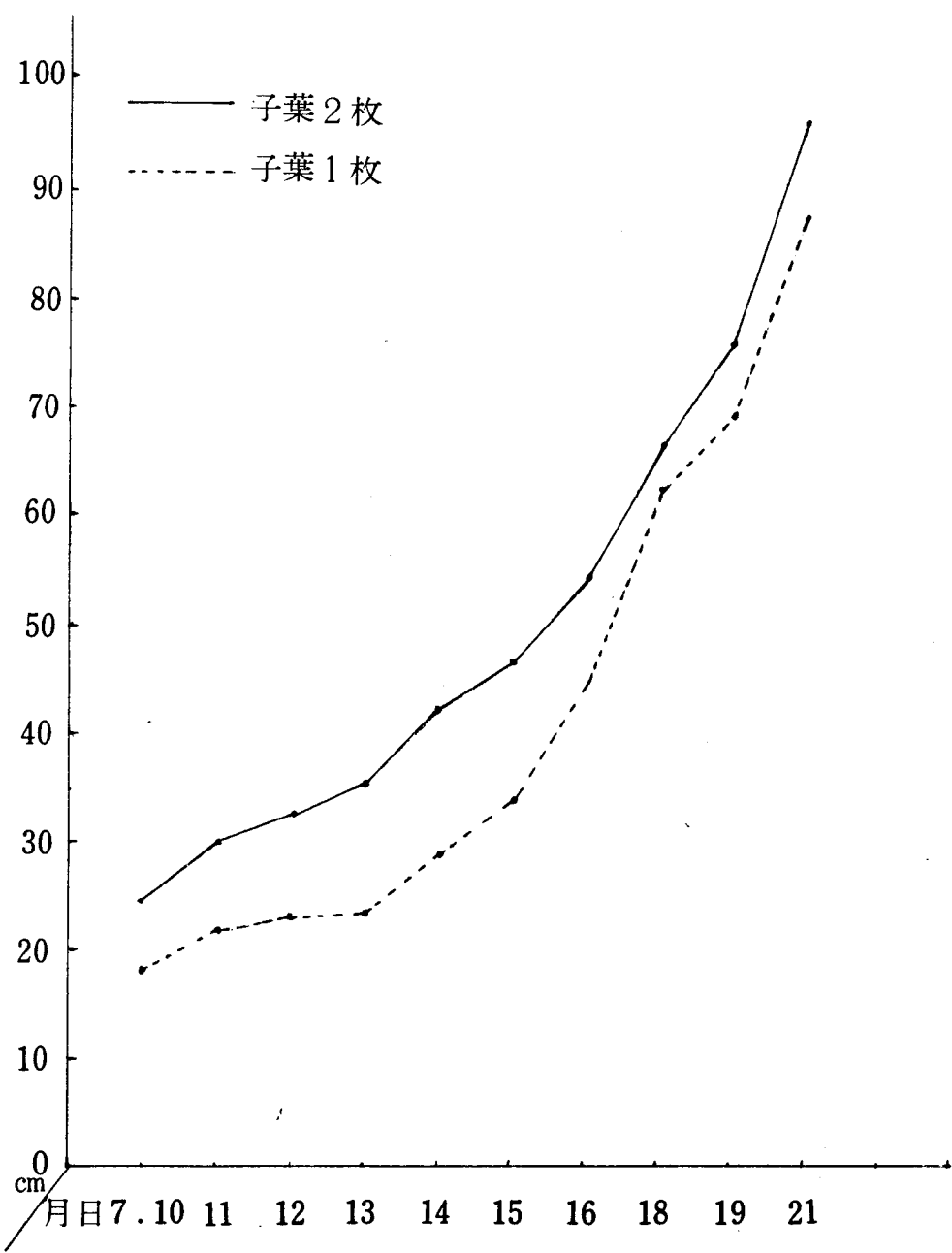
【図 II】 不完全(1枚)子葉のもの  
右第1葉の成長図



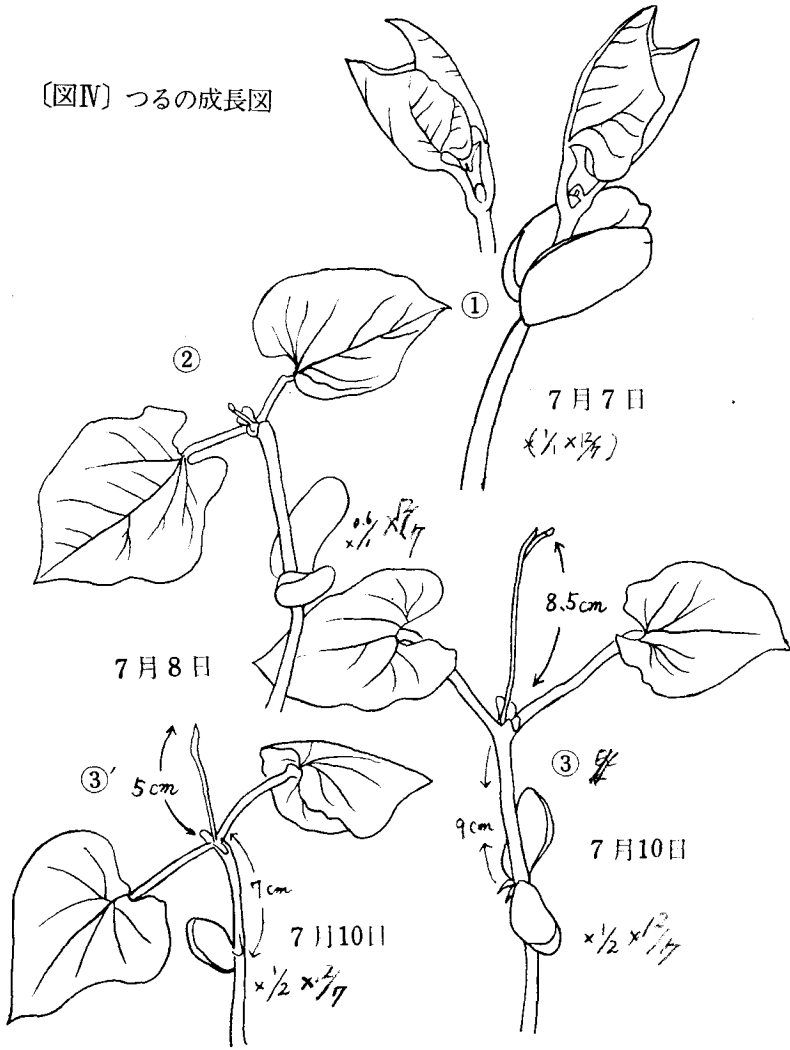
【図 I】 完全子葉のもの  
右第1葉の成長図



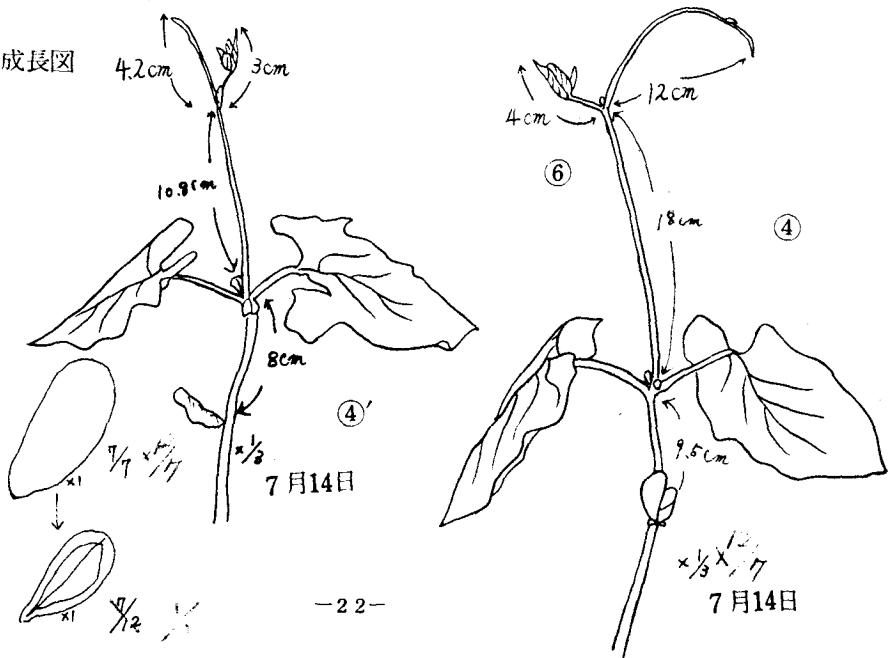
[ 図 III ]



〔図IV〕 つるの成長図



〔図V〕 つるの成長図



### <考察>

一苗だけ、子葉を一枚取り除いた。その時の二本の苗は、ほぼ同じ大きさの約12~13 cm程度で、図Ⅳの7月7日のように第一本葉が、抱き合わせたように対生していた。

毎日、両苗とも著しい成長をなした(図Ⅳ、Ⅴ)。しかし、すでに両苗の成長を比べるとつるの長さにも葉の面積にも表Ⅰ、Ⅱ、図Ⅲで見られるような差が付き始めていた。単葉の第一本葉は、図Ⅰ、Ⅱのようにそれぞれ成長していった。

緑色の固めだった子葉は、これらの成長とともにやがて黄色化したしわの多い水分のぬけたものようになり、ついに15日には、すべて落ちてしまった。子葉脱落后2~3日は、同じ速さで成長していた葉が、18日頃になると両苗の成長の差はちぢまった(表Ⅰ、図Ⅰ、Ⅱ)。また、つるの方も15日前後の成長は大きかったが、18日頃になるとやはりその差はちぢまった(表Ⅱ、図Ⅲ参)。これらのことで子葉の養分が、どれほど苗の成長にあたって重要かがよくわかる。第一本葉は、18日頃から急に成長が止まり、すでに第二本葉、第三本葉と芽が出ていた。第二本葉から後の葉は、第一本葉とちがひ、小葉が三枚下図<sup>Ⅴ</sup>圭のようについた複葉でそれが、一枚の葉として下図Ⅱのように互生している。不完全子葉と完全子葉とを比べてはつきりすることは、子葉の落ちた日が、不完全<sup>あつて</sup>子葉は完全子葉より早かったということと、土から子葉までの長さ<sup>あつて</sup>と子葉から第一子葉までの長さ<sup>あつて</sup>が3 cmほどの差をつけたまま成長が止まっていたということだ。後からのつる全体の大きさは、ほとんど目測ではその差がわからない程になっていたが、子葉の影響が、後の成長に関係するのか、2 cm程伸びた7月25日頃、完全子葉の方にだけ白色の大きな蝶形花をつけた。あいにく暑い天候が続き、鉢植えだったため花はからしてしまい実のらせることができなかった。

# 秋 目 採 集 記

2年 唐仁原 俊 哉

9月15日 晴れ

文化祭の資料集めで秋目まで行った。同行者は、佐方・山本両先生、安富さんの4人で、昼から先生の車で秋目に向かう。目的はウニを採ることであった。秋目湾の南側の岩のつきでいる所できがした。が、さがそうとする時は、なかなか見つからないものである。岩のわれ目など、さがし回っているうちに、波のかかる波のわれ目にしっかりとくっついていて、波にぬれないようにとるのは大変な苦勞であった。数日後におしせまった文化祭を前に、あくせくした気持ちで、何もかも今になってあわてている感じで落ちつきがなかった。

秋目の北側の平瀬付近の道路工事現場近くを、岩石、植物など見て回った。そこでは、ルリタテハ、ツマグロヒョウモン、ツマベニチョウ、などを目撃したが、うっかりネットなど採集道具を忘れて持って来ていなかったために、何も採集できなかった。

帰りに、小湊千拓付近を通る時、桜島の噴煙が見え、きょうのいらいらした気持ちを吹き飛ばしてくれた。

本日の目撃チョウ

○ルリタテハ ○ツマグロヒョウモン ○ツマベニチョウ ○ジャコウアゲハ  
○クロアゲハ ○ナガサキアゲハ ○アオスジアゲハ ○モンシロチョウ

○ツマベニチョウ

このチョウは、わが国に産する最大形のシロチョウで、奄美諸島、沖縄諸島、台湾などに多く産する熱帯系蝶で、九州本島においては、薩摩、大隅半島の南部でしか発見されていない。シロチョウ科のものと思えないほど、飛翔は敏速で、花を訪れるもののほかは捕え難い。幼虫は、フウチョウソウ科のギョボクを食べて生育するが、アブラナ科のイヌガラシ、ミチバタガラシ、ナスナなどでも飼育できる。しかし、成虫は、やや小型となる。写真は、ギョボクの葉のうらに蛹化したばかりの蛹を写したものの。(写真中央)

秋目で5月末に採卵し、生物準備室内の鉢植えのギョボク上で、6月1日に孵化し、同22日に完全に蛹化、7月2日には羽化してみごとな、雄のチョウが誕生した。

## ツマベニチョウを求めて

2年 唐仁原 俊 哉

(1) 1972年6月4日 快晴

浜川さん木佐貫さんと私と三人で、ツマベニチョウの幼虫を採集に秋目へ出かけた。天気は朝から快晴で、真夏のような暑さであった。先輩方と大浦小前で待ち合わせ、午後1時30分各自、単車で出発。ツマベニチョウの成虫には今まで何回となくお目にかかったことがあったが、幼虫や食草のギョボクのある所など知らなかったので、先輩方に教えてもらうために、本日秋目に行くことにした次第であった。今までは秋目に行くとなると、10キロ近く歩かねばならなかったがきょうは愛車で直行。県道のまわりを注意深く見ながら、砂利道をスリップしないように安全運転。途中でアゲハ、アオスジアゲハを数頭目撃。30分もしないうちに秋目についた。まず秋目湾の北側にある民家の庭のすみにあるギョボクを見に行った。秋目で最初に見たギョボクである。なんだこんな所にもあるのか。と思いながら卵を1個見つけた。生みつけられてまだ幾日もたっていないような新鮮な卵が葉柄に近い所の葉脈の上にあった。はじめて見た卵である。だがどこを見回しても幼虫は見つけられなかった。こんどは、ギョボクが何本もあるという谷川ぞいを登ることにした。場所は、鑑真の上陸記念碑の前の谷川。登る途中、見るもあざやかに成虫が谷川ぞいに亀ヶ丘の方へ飛んで行くのが見える。やがて谷のつめたい水で足をぬらしつつ目的の場所についた。暑さの中をがんばってやって来たかいたいる幼虫が卵が。初めて見たこの感激。さっそく先輩方にいろいろと聞いた。これが何令、これは何令(写真よ).....よく見ると、幼虫の顔は何かをあしらったような、こっけいな、グロテスクな感じがし、こんな変なもの、あんな美しいチョウになるのか、と幼虫を見ると疑問に思えて、自然界の偉大さが恐ろしく感じられる。さっそく管瓶に卵を2個、孵化したばかりの幼虫を2匹、終令を2匹探った。「無事に成長してくれよ」と祈りながら心は羽化する日を夢見ている。先輩方にあれこれと聞きながら下りはじめた。これからは場所もわかったし、単車もあるから何度でも来れると思いつつ、わが家にもギョボクを植えて、自分で飼育してみようと手ごろな木をさがしたが見つからなかった。断念して大きな枝を折って持ち帰ることにした。途中秋目の店でコーラを飲んだ。スカットさわやかな満足感にひたりながら、帰りの足どりもかるかった。

○ ツマベニチョウ

幼虫 初～終令まで多数目撃 成虫 8を数頭目撃

幼虫4匹・卵2個を採集

○ モンシロチョウ 井 ○ アゲハ 井 ○ アオスジアゲハ 井

(Ⅰ) 6月24日 晴れ

ツマベニチョウを求めて秋目へ行った。6月4日に先輩方にギョボクのある場所や幼虫についてなどいろいろと教えてもらったので、一人ででかけた。途中いつものようにゆっくりと、回りを見つつ安全運転をしながら秋目に向かった。秋目につくまでの間には、モンシロチョウとアゲハを数頭見たばかりであった。秋目につくと最初に、湾の北側にある民家の庭のギョボクを見に行ったが、幼虫も卵も全然見られなかった。どうしたのだろう、少しぐらいいてもいいはずだがと思いながら、南側の鑑真の碑の前の谷へ行って見た。登る途中のみかん畑のわきには、トケイソウがたくさんなっていた。…………… ギョボクのある所について、付近のギョボクをずっと観察して廻ったが、ほんの数頭しか卵も幼虫も発見できなかった。この前来た時の半分もない。成虫となって勇壮に飛んでいるんだろうと思い、いつも蝶道となっている所を見ても、1頭も目撃できなかった。どうしたのだろう？ と疑問を残しながら、貴重な幼虫を3頭採集して帰途についた。

1972年度の迷蝶記録

2年 唐仁原 俊 哉

○ タテハチョウ科

メスアカムラサキ

8月12日	野間岳山頂	1♂ Coll	山本先生
9月23日	加世田市宮原 “おかん山”	1♂ Coll	浜川睦文

○ マダラチョウ科

カバマダラ

7月7日	加世田市万世	1♂ Wit	浜川睦文
7月15日	加世田高校内	1♀ Coll	内田周作

○ ジャノメチョウ科

ウスイロコノマチョウ

9月21日	加世田市当房	1 Coll	浜川睦文
12月23日	加世田市当房	1 Coll	浜川睦文

## 加世田周辺地域の地質構造について

2年 安 富 朱 美

一昨年、プール建設に伴ない、本校のグラウンドで地下水のボーリングをしたので、その時の資料、及び、他の地域のボーリング資料、その他の調査事項をもとにし、地質構造を簡単に述べてみます。

### 第1図

この図は大浦入口と川辺町下山田を、ほぼ東西に切断した図で、基盤岩の砂岩、頁岩の中に、ドーム状、岩脈状に斑岩類が貫入している。また大浦入口には 岩も岩脈状に貫入している。下山田付近に多くみられるシラス、溶結凝灰岩は標高100m程度まで分布して、基盤岩を不整合におおっている。したがって下山田付近の畑作地帯は火山灰土であることがわかる。なお、基盤岩の砂岩、頁岩の互層の走向はほぼNS~N30°Eで、傾斜は、ほぼ垂直であるが、地質構造が非常に複雑で、褶曲、断層などが多いと思われる。

### 第2図

2図は万世と久志をほぼ南北に切断した断面図である。磯間山脈南から久志周辺までは、安山岩類が基盤岩類を不整合におおっている。長屋山付近の班岩類の貫入岩体とは異なって、急な崖をつくっているし、非常に風化されやすく奇妙な峰がみられる。河川のある比較的低位の大木場や大崎付近にはシラス、溶結凝灰岩が入りこんでおり、低い台地をつくっている。このことからシラスなどが火砕流堆積物であることがわかる。また、所によっては二次シラスも認められる。万世周辺の残丘状形態のものは、古期砂丘層で、現在の汀線にほとんど並行している。かつてはこの砂丘近くまで海岸線がいりこんでいたと思われる。

### 第3図

本校と白亀をほぼ東西に切断した図で、本校のボーリング資料と、今村場の資料を中心に作成したものである。白亀では基盤岩の砂岩、頁岩類を、不整合にレキ層がおおい、さらに溶結凝灰岩、その上をシラスが不整合におおっている。また、ボーリング資料では溶結凝灰岩は二層あり、その間に砂層をはさんでいる。これは二層間に時代的な間隙のあったことを証明している。また、基盤岩と、溶結凝灰岩の間に泥層、砂層があり、特に泥層にはカキの化石や有孔虫が含まれている。これらの有孔虫やカキの化石は、加世田市街地のとらやデパートの地下約60メートル付近からのボーリングから出てきたもので、浅海の海底堆積物である有孔虫が出てきたことから、この地域に数回、海の浸入があったことを示している。

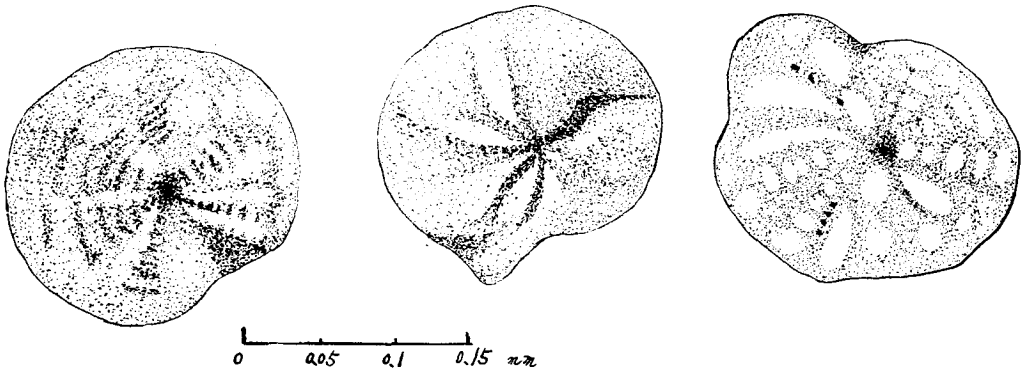
標高50メートルのあたりに、巨礫層が存在しており、かつての海水面、又は川の高さを示しているが、礫層中のレキは、斑岩類、安山岩類、砂岩などで、直径1メートルから数メートルのものまであり、亜円礫から円礫である。比較的、よく円磨されていること、及び、これらの礫がこの周辺にないことから、長い距離流されたことを示している。これらと同様のものが、内布、蔵多山山頂に分布しているが、高度が異なる。したがって枕崎から加世田方面へ流れる大河川を考えるか、大規模な隆起が考えられる。

#### 第Ⅳ図

この図は武田神社を中心とした断面図である。加世田農高周辺の台地はシラス台地であり、加世田市周辺の同じ高さの台地はすべて同質である。台地から頭を出しているところは、ほとんど基盤岩の砂岩、頁岩などの露出である。これは武田神社裏の水源地のある小高い丘をみるとわかると思う。

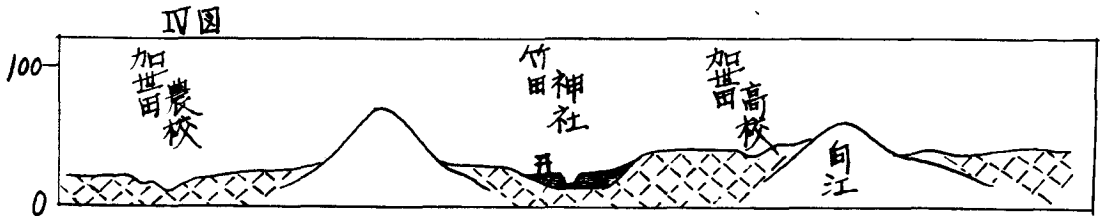
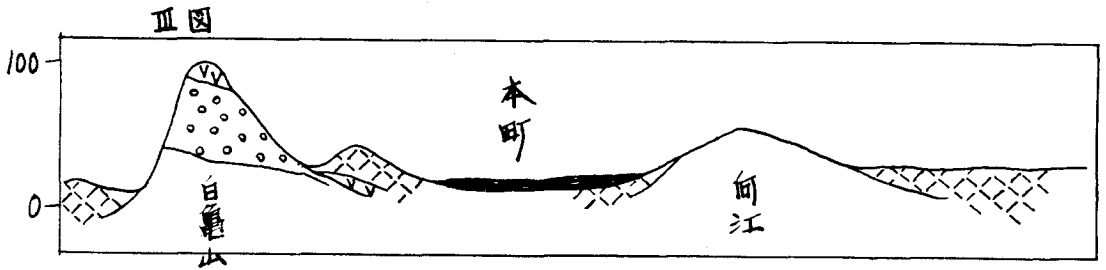
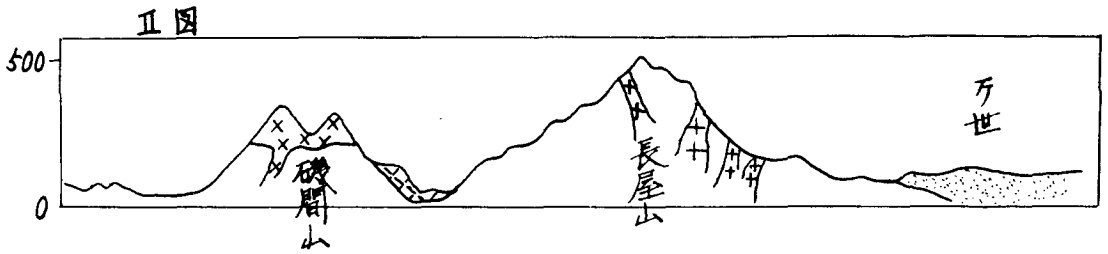
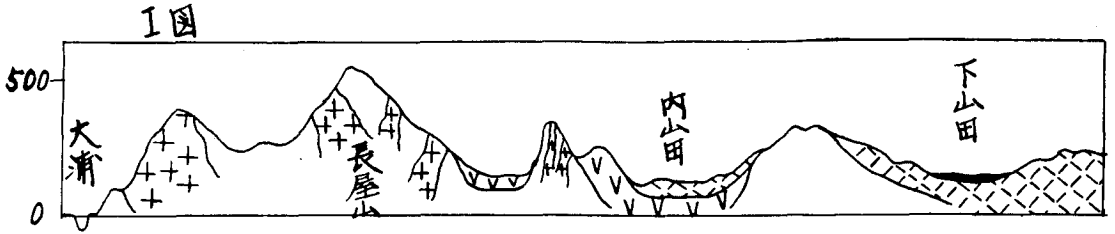
河川の地域には河川堆積物がみられ、かつての河床であることがわかる。河川堆積物は別府城跡の崖の6～7メートルの所や、加世田消防所横の崖4～5メートルの所にもみられるが、現在の河川の流れの中、及び高度とはだいぶ異なる。また、シラスの上に二次シラスがおおっており特にローム層は開聞岳の噴出物だそうである。








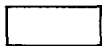
以上の4ヶ所の断面図を作成したわけであるが、1人ではなかなか満足にできず、今後とも、機会があるごとに、いろいろ観察していきたいと思う。



有孔虫の図





- |  |  |   |   |
|--|--|---|---|
|  ハン岩類 |  アンザン岩類 |  溶結凝灰岩 |  シラス  |
|  レキ層  |  砂丘砂    |  沖積層   |  基盤岩類 |

4月29日(SUN) 快晴

— 第1回 採集会 ( 亀ヶ岳 ) —

2年3組 南 洋子

参加者 顧問 佐方先生 山本先生

3年 浜川睦文 平山智章

2年 宮原康展 川野成子 木戸まり子 南 洋子

1年 鮫島 泉

コース 加世田発(8:25)～バス～大浦着(9:00)～徒歩～亀ヶ丘頂上着(12:40)  
～昼食～出発(1:50)～牧草地(2:10)～徒歩～登山口着(3:40)～大浦発  
(4:30)～バス～加世田着(5:10)

今年度最初の採集会は、新人部員の歓迎会として行なった。バスは、赤字路線のためか乗客は少なかった。大浦で下車。全員メモ帳を持ってきていなかったためにメモ帳を買う。20円なり。ひばりの鳴き声を頭上高く聞いて歩く。時々、目をつり上げたようなトラックなどと会うことがなかったら、たいへん快い気分です。採集したのに。やっぱり春。タツナミソウ、ヒメハギ、スイカズラのように花がついていた。しかしなぜかスマイレは、タチツボスマイレしかなかった。その他にソクシラン、マルバシャリンバイ、ニガキ、シュンラン、トウバナ、キブシなどがあった。頂上からの眺めはすばらしかった。秋目湾をはじめ昨年合宿した秋目の小学校跡が一望のもとに見下せた。自然って美しい。造化の神様はセンスバツグンなのだ。

帰途、牧草の間の名ばかりの小径でゆるやかな斜面を下り、目的のオキナグサをさがす。ノアザミの花の草原を通りぬけ、90度まがったところに数本、オキナグサが見つかった。そのオキナグサは、老人のぼうぼうとしたしらが頭のような集合果が数か所で快い風にゆれていた。少し若い者は銀色の光沢をみせていた。4月はじめなら小さいチューリップ形の暗紅色の花が下向きにうなだれて咲いていたに違いない。この付近に、オカオグルマの黄色い花が咲いているのも珍しいということだった。下りは、本坊さんの車がパンクして、唐仁原さんが、行き来した他は別に何もおこらず、ホソバブタ、タマシダ、コスズメノヒエ、ホソバイヌビワ、タチシノブ、ウラジロガシなどを採集した。

6月25日(SUN)快晴

## —— 第2回 採集会 (八瀬尾) ——

2年3組 東 康子

参加者 佐方先生 山本先生  
3年 本坊徳光 平山智章 木佐貫彰 浜川睦文 西輝夫  
2年 宮原康展 唐仁原俊哉  
南 洋子 木戸マリ子 前田明子 荒牧玲子 東康子  
1年 鮫島 泉 桧垣信之 福元絹代

コース 加世田駅発(9:10)―<バス>田代(9:40)―<徒歩>―八瀬尾公園入口(10:40)―八瀬尾の滝(12:00)―休憩(1時間)―<徒歩>―引き返えす(1:30)―八瀬尾の滝(2:00)―<徒歩>―八瀬尾公園入口(2:30)―<徒歩>―田代(3:40)―田代(4:00)―<バス>―加世田駅着(4:45)〔後出地図参照〕

太陽は早くもギラギラ照りつける日曜日。

わいわい騒ぎながら、加世田駅に生物部員集合。メンバーは、先生方まで含めて17名。きゅうくつなバスに乗りこみ、国道225号線へと出発進行。

約30分後、田代で下車。まずは、採集用具の点検。それぞれ、専門の道具を持ち、そろそろと歩き始める。今回の私は、植物班。佐方先生についてさっそく植物名を記入。始めにヒメヒオオグズイセン……だいたい色の花だ。アゲハが、吸蜜に来ている。ドクダミ、チシャ、テイカカツラ、ヤマゴボウ、ソクズどれも白い花を咲かせている。

きれいに舗装された道路の横の土手にキツネガヤが、穂をいっぱい立てている。イタビガスラやノキシノブが、青々と茂っている。まだ色のつかないナツツタの葉もある。季節にあわないぐらい濃い葉が、目に入る。クサギだろうか、黒赤色のつぼみが、ポツポツついていた。

進むにつれて、キツネガヤの中にギンギンの穂がめだつ。オオイヌタデが、花を咲かせている。カラスムギの穂も見える。ノブドウもつるをまいて、ノカンゾウは、つぼみをつけて、夏を待っている。行くうちに小さな橋を見つけた。トキワススキに囲まれて、まるで穂の中の橋だ。この橋の名は? 「滝山橋」小さいわりにいい名前だ。橋の回りをひと調べ。アザミが、ポツポツ咲いて、ボウボウとはえた草の中にしばふが、ちょぼちょぼあるだけ、あとは別がない。また、私と先生といっしょに歩き出す。みんなそれぞれ組んで先へ行ってしまった。モンシロチョウも行ってしまった。アオスジも飛び去った。私達は、マイペースで行こうとふと足先を見ると、ヤブマオのつぼみにイナゴが、ピョンピョンはねまわっていた。テリハノイバラの花も白く咲いている。ワレモコ

ウ、ネジバナの花も咲いている。ボタンヅルが、ギョウシバの中に、ぬき出していて、その中にポツポツとヒメグメのかわいい穂をもたげている。歩けば歩くほどいろんな植物が、目につく。とても無格好に伸びたごつい穂がみえた。「先生、あれはなんですか」ときくと、ニンジンだと聞いてびっくり。ニンジンというと根の赤いところしか知らないなんて……と思った。

まだまだ舗装の道路が続く。私たちが、歩いている反対側の土手に茶色のボウボウとした穂が目についた。トダシバではないか…。私たちは、また、歩きはじめた。しばふ（といってもボサボサの野しばふだけど）の中にニワゼキショウの花が、かわいい。クサヨシもある。ナワシロイチゴが、赤い実をポツポツつけていた。アルバハギ、ホルトノキ、アカメガシワなどもしばふとともにほえていた。ノイバラの白い花が、目にとまる。ピンクのコマツナギ、だいたい色のオニユリ、それにナノハナとゆくさきさき、美しい。そんなあたりにアキノノゲシとアメリカセンダンのそばにベニバナボロギクの花、ミヤコグサの花が、咲く。足元にヒメジョオンが、ポツポツと咲いてコモチンダもあった。ゼンマイ、ツルコウジ、タラヨウ、ヤマビワもあった。

湿った土に、たくさんのアオジアゲハが、吸水に来ていた。早速、写真におさめた。

道路ぞいにヒノキ林があり、その下には、クマイチゴやタランノキ、ドクダミ、ヒノヒオキスイセンのだいたいの花などが、ほえていた。ウラジロの群落もあった。土手には、ワラビやコナラクリの白っぽい花や枯れたソクシンランもあった。ソバ、ゼンマイ、咲きおえてしまったニオイバラ、またエビヅルやキイチゴ、スズメノヤリなどが、目についた。

道路の左側には、スギ林が続き、タケニグサの花が、見える。どこにいるのか、ホトトギスの声がする。土手の影にイクチというキノコが、ほえていた。土手の影とは、後方に松が並んでいるためにできたものだ。左右対称に松とヒノキが、両がわにずっと並んでいる。そんな道を進んで10時40分に、やっと八瀬尾公園入口という立て札のついた横道に入った。広々とした舗装の道から、こんもりと木の茂った細めで、でこぼこの道を歩いていった。

道は、上り坂が、ゆるやかに続いている。まず目についたのは、人家の垣根のところにアキノタムラソウやカエデコロなどはほえていること。また垣根の影のところには、シノブやヒメバライチゴなど目についた。山だからなのか、木が、こんもりと茂っていて、その間を水が、ちょろちょろと流れている。そのため、シダ類に絶好の場所である。（シダ類だけではないだろうけど…）アマクサシダ、ゲジゲジシダなど、ちょっと変わったシダが、ごくあたりまえのように群生している。今までと違ってかわって、ずいぶん涼しいので、どんどんみんな歩いていった。地形が、変わったのでちがう植物が、たくさん目につく。ハナニガナ、コアカソ、オトギリソウ、ムカゴソウ、土手には、ラン、またハゼの木やカンコノキなどが茂り、ティカヅラやエビヅルが色ぞえしている。オオバコもある。のびきってしまったミツバには白い花が、ボソボソと咲いていた。他にニガキやクマノミズキなど、ふだんちょっとみられないものが、わりとたくさんある。真赤なハウワイイチゴの実が、初夏の若葉にあざやかにほえていた。また、「夏だなあ」と思わせるツククサが、ここでは早くも青い花をつけていた。そして、木かげも終ろうとするところにヤマコンニャクイモが、群がっていた。

時はたち私達の頭上には太陽がサンサンとふりそそぐ。そんな中に、ネコノチチ、コバンノキ、スイカズラなど広々と葉がしげっていた。ヌルデ、ネジバナなどを採集していくと、また橋があった。前より少し大きい。石河路橋と記されている。この橋を渡ってあたりの影でひと休み、ヤマジノギクなどが、目についた。数分してまた歩き始めた。まず、ネコノチチ、つづいて、マルバウツギ、遠くにオンツツジとめあたらしい。また、キツネガヤ、キツネボタンの花が初夏を飾る。道の右側には、ツゲノキが2mおき位に1本の割合で約100mぐらいの並木を作って植えられている。そしてその木と木の間にはコンニャクが群がっていた。湿度が多いらしくて、アオスジアゲハなどが、吸水にきていた。並木が終ると、タケニグサの穂が高くぬきんでていた。一方土手にはイタチガヤとか、ダイコンソウ、ミズヒキなどがはえておりイヌザンショウの香りが、とてもよく、ウマノミツバがここでも花を開いていた。歩いて行くと、マテバシイの実が落ちていた。カニクサという名のシダやアカネ、サネカズラ、タニワタリノキと採集して行くうちに、右手目前にとっても大きな葉が、青々と茂っている三本ほどのアブラギリを見つけた。そして、木戸さん、南さん、それに私の三人で、そのアブラギリをバックに写真を撮りパチリ。時計は、もはや12時10分前をさしていた。「もうすぐだ」と少々バテギミの足を運んで行くとムラサキニガナとエゴノキが見えた。イチイガシ、クブノキ、カラスザンショウと採集が、半分いやになりかけたころ木グミの実を見つけた。そんなとき、すぐそこにあるかのように滝の落ちる音が、とてもはっきり聞こえてきたので、急に私は元気になって走り出していた。12時ジャスト、八瀬尾の滝を私たちは、目前にしていた。

早くついていたメンバーが、水遊びをしていたので、私もすぐさまジーパンのすそをおりまげで、足をつけた。ヒンヤリとして、疲れた足に気持ちよかった。顔を洗ったりしてから、イチャクソウやナチシダ、モロコシなどが、はえているところに、どっかりとすわりこんだ。みんな、落ちついたので、滝の由来を記した記念碑の前あたりでそろって昼の弁当を開いた。ワイワイガヤガヤと1時間してみんなで写真をとってからもっと奥へ行こうと歩き始めた。ヤブムラサキ、アオモジ、コマツヨイグサの花、コウジツギの紫の花が美しい。5分ほど歩いたが、急な坂のところで引き返し、30分ほど滝のあたりを調べる。ハマクサギやマツカゼソウ、オカトラノオ、キカラスウリの花、ナギ、コバンモチなど採集した。山くずれした裸地にヤクシソウやニバチボロギク、タケニグサの小さい苗の群生なども見つけた。また、時期はずれのツワブキの花が、あったのだが少し変わっていたので私の手記には「変体」と記されてしまった。他に真赤なキノコもあった。直径が10cmほどでとびぬけて色はえていた。

1時30分、奥へ行ったメンバーが帰って来た。イシガケチョウをとったというてよろこんでいた。私たちは、午前中、トボトボと植物を採集しながら歩いた道を急ぎ引き返し歩きはじめた。3時過ぎには、歩きおえて田代の停留所へついた。土手にすわりこみをしてたりしてバスを待った。来る時、軽かった胴らんは、採集した植物でいっぱいになってはみ出したりするほどだった。バスに乗りこむと客のおばさんたちにじろじろ見られたけれど、植物採集をやったんだという気持ちと疲れで少しも気にならなかった。みんなぐったりと座席についた。

今回の道のりは、楽な方だった。滝の流れる音や葉のこもりと茂ったすずしい道、真赤なキノコなどを思い出して「今度、車でこよかな（八瀬尾の滝まで車で行ける）」などと考えるうちにうつらうつらとしはじめ、いつしかわたしは眠ってしまった。

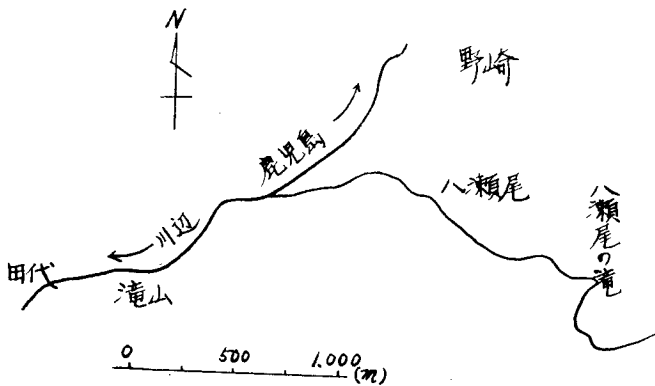
加世田の停留所には、もう夕日がいっぱいさしていた。

〔昆虫班の記録〕

入部して初めての採集会であったし、天気も絶好の採集日よりで、心がおどるような一日であった。田代でバスを降りてからずっと先輩方にチョウのことなど、いろいろ聞きながら採集をした。途中のサツマイモの畑などずっと畑がつついたが、見られるチョウは、モンシロチョウ、アオスウラナミジャノメなど他のチョウも多数見られるようになった。また八瀬尾についてからはアサギマダラヤシガケチョウなど目撃できた。

＜採集及び目撃したチョウ＞

- モンシロチョウ                      ○キチョウ                      ○スジグロシロチョウ    十
- ウラナミジャノメ                  ○ムラサキシジミ    2 wit                  ○ヤマトシジミ    1 wit
- サミマシジミ                      ○コミスジ                      ○イチモンジチョウ    2 wit
- アカタテハ    2 wit                  ○ツマグロヒョウモン    （るがほとんど）
- イシガケチョウ    1 coll, 2 wit                  ○アサギマダラ    1 coll, 1 wit
- アオスジアゲハ                      ○クロアゲハ                      ○アゲハ                      ○キマダラセセリ    2 coll



知らぬ間に  
おち来る滝の  
ながれなるる  
高嶺より  
くつかさたる  
らくくもの

（記念碑中の歌）

## — 八瀬尾（川辺町）シダ採集記 —

1年 福元 絹代

6月25日（日）生物部の部員の方々、それに佐方先生、山本先生と八瀬尾の滝に植物採集に加えていただき御一緒しましたが、とても楽しい1日でした。バスを降りてまず目についたものは、コシダ（ウラボシ科）です。これは普通、私達が日常の生活の中でよく見かけるものですがこれと並んでしばらく行くと、これもまた私達につながるの深いウラボシ（ウラボシ科）を見かけました。左手の方には杉山があり大きな杉がすくすく育っていました。八瀬尾公園入口と書いてある所で一休み、それから八瀬尾には入ったとたんに目についたものはミツデウラボシ（ウラボシ科）らしい植物です。おうど色をした山の斜面にはびこっている邪魔になる植物をちょっとおし分けてみると、黒味を帯びた緑の薄い葉の裏に円形の子のう群がきちんと二列に並んでいます。まぎれもなくミツデウラボシです。全長10～15cm位、大きいものになると30～35cmもありますがここにはありませんでした。これは日当たりが悪いためだと思います。それから2～3分のうちには、ゼンマイ（ゼンマイ科）とゲジシダ（オシダ科）を見つけました。しかし、私は初めはゼンマイだと気づかず磯間山で見つかりリュウビンタイ（リュウビンタイ科）の若いものかと思っていたら、佐方先生がゼンマイだと教えて下さいました。なるほどよく見るとリュウビンタイより葉は薄く、色も少しちがうし、また丸味を帯びている。またリュウビンタイは平行脈であるのに対し、これは網目状である。

それからしばらく行くと、日当りのよい道端沿いに黒色に近い紫やこげ茶色をした葉柄をもつホシダ（オシダ科）が群をなして連なっていました。

柔らかな陽ざしに包まれながら、ゆっくり歩いていきました。すると左側の道端に少し変わったものを見つけました。茎が2つに分岐していて普通は1つなのですが、双頭なのです。葉を見て見るとホシダであることがわかりました。そしてその近くでこのような奇形を2つくらい見つけました。南さんや、東さんたちは佐方先生について植物名をメモ帳に記入したり、質問をしたりしてとてもにぎやかにやっているようでした。行く所、行く所、ホシダやコシダが群をなして生えています。その他、日陰の岩の上に比較的大きなヒトツバや、ゼンマイがありました。

こうして、12時近くになって八瀬尾の滝のある所に着きました。ザーッと、涼しそうな音をたてながら、しぶきが空中に飛び散る様はさながら“水しぶきの舞”です。真白に冷たく、そして何ともいえないすがすがしさを感じさせます。そんな中で楽しい昼食をとりました。そしてそこで今まで見たこともない、とてもきれいなシダを採集しました。佐方先生が、これはヒノキシダ（チャセンシダ科）というシダだと教えて下さいました。私は、葉がとてもよくヒノキに似ているので、そういう名前がつけられたのだらうと思いました。へん平で、黒緑色に近い緑で、光沢があって、そう、ちょうどあのヒノキの葉に、みずみずしさと、光沢とを加えたものを想像していただければ大体の感じはつかめるのじゃないかと思います。これを採集してから、しばら

く休みました。それから水辺に大きな葉を広げているナチシダを採集しました。

それからまた、上の方へ登り始めました。そこからは、シノブや、オリヅルシダや、その他今までにあったようなものでした。みんな途中まで行くとひき返して来たので私もおりました。帰る途中で、カキランという草を見つけました。葉はユリ科の植物にとってもよく似ています。うすいオレンジ色の小さい花びらを、先の方につけていました。行くときは見つけれなかったのにこんなものがあったなんて、と、とっても嬉しくなりました。そして杉の木が植えてある薄暗い所で大きなタイヌモチシダ(シシガシラ科)を見つけました。葉身は1m位、あるいはそれ以上あるように思われました。

こうして生物部の方々と、楽しくすごしました。私にとっては新しい発見をした1日でした。

採集したシダ植物

うらばし科

○ヌカボシクリハラン ○ヤリノホクリハラン ○ホシダ ○ワラビ ○ナチシダ

おしだ科

○オキナワコクモウクジャク ○ヘラシダ ○ミヤジマシダ ○オリヅルシダ

ちゃせんしだ科

○ヒノキシダ ○コモチシダ

#### ○ 飼料のアオキ(写真1)

アオキの葉は冬季牛の飼料として恰好なものだとはあちこちで聞いていた。今日のあたりアオキ刈りから帰路についている二人のおばさんの背中の中の荷を見て成るほどと思った。感心したまま通り過ぎたが、待てよ、これは記録写真に残すべきだと思いつき、山本先生に追いかけて写して貰ったのがこれである。前左方にはも一人のおばさんの背中のアオキの一部が見える。この附近にはカンラン(寒蘭)採りの人とも遭ったと、そのおばさん達は話してくれた。(1972年12月17日)

#### ○ オキナグサ(写真2)

1972年4月第一回採集会の時亀ヶ丘の草原で写したこの草は随分変わった花である。アネモネに近い種類で、内面暗紫色の半開の花は半鐘状で下向きに咲くので人目をひく。オネコ、オネコ、ナシケ、クブナヤスカ、サンカデョ、サンカナラ、ヒヨヌクメ……などのざれうたも伝わっている(川辺高校芝原等先生にきく)。オネコはオキナグサの方言。「お前はなぜ首をうなだれているのか」「寒いからよ」「寒いなら火にあたれよ」……お年寄りにきいたら、これに類するうたを覚えておられるかも知れない。やがて花びら(実はガク)が落ちたらシャンとした白髪の翁の姿となるのも面白い。



## 野間岳調査会（第三回，採集会）

2年 南 洋子

期 日 1972年8月11日～13日

参加者 顧問 佐方，山本両先生

3年 本坊徳光 木佐貫彰 浜川睦文 平山智章

2年 唐仁原俊哉 宮原康展 南 洋子 東 康子 安富朱実 前田明子

1年 鮫島 泉 市来勝一郎

特別参加者 松山橋久先生（吹上高，本校卒）他2名，佐方功幸（本校卒）

8月11日 今日から2泊3日の生物部合宿が始まるのだ。宿泊地は、野間神社境内でその使用許可は既に得ている。皆元気で学校に勢揃いする。今年は山本先生が免許をとられたので、荷物は先生の車で運んでいただくことになった。出発まぎわになって車のキーをトランクに入れたまま閉じてしまったことがわかり、一同気をもんだ椿事もあった。そのため我々バス利用者は馳足で加世田駅まで、辛うじて8時40分発野間池行バスに乗りこむことができた。約40分後小浦で下車、採集しながら川沿いに歩いた。椎木につくと登山口の標示があった。その店できくと神社まで1時間位という。元気を出してのぼりはじめる。部落をはなれるとだらだら坂で人家はない。採集しながら檜木山部落についた頃、食糧補充のため、私と東さんが先の店まで引き返さなければならなくなった。この時、たまたま下ってきた通りがかりの車に便乗できて助かった。太陽国体の聖火の1つがこの野間岳から出発するのでその打合わせに来た車であった。椎木で食糧調達後急いで先発隊を追いかけた。採集しながらのだらだら坂の礫の道は意外に時間がかかった。店できいた時間の倍以上もかかって漸く野間神社についた。山本先生は先着荷物を整理しておられた。はじめて見る野間神社は廃墟という感じであった。境内は上も下も草が茂っていた。石段が二つある。下の石段をのぼった所が社務所？のある下の境内、ここの草を適当に刈払ったり折り敷いたりして2張りのテントが立った。カマドはこの石段の登り口近い所に、大分はなれた所に、ショウベンノキの枝葉で囲んだトイレも完成した。水は4～500米下った湧水、少し不便だが水量は十分だ。カマドの前には、もえる木、もえない木が集まった。折り焚く柴の夕煙に涙流してカレーを作る。腹もよかったが味もよかった。

8月12日 朝7時頃起床。神社後から頂上までの植物、蝶、クモなどの調査を目的に、朝食後まず先発隊が出発した。我々女性群は、平山さんと本坊さんらと昼食の準備のため、遅れて後を追った。不案内の道で不安ではあったが、とに角頂上に辿りついた。頂上はいくつかの大きな岩塊で足場はせまく、四方が自由に眺望できるとはいえなかったが、西方に突き出た岬、はるかに望む東支那海の水平線はすばらしかった。地球は丸い！こんな実感であった。岩塊の間に

或は高く或は低く陣どって昼食。食後それぞれ分担して採集調査をした。頂上での感激を胸におさめて一目散にかけ下った。こんどは迷うことはなかった。キャンプ地から一足先に帰るといいう安富さんをのせた山本先生の車で椎木まで買い出しに下る。夕食のおかずは、山本先生に手伝っていただいたサツマ汁。夜は、トランプ、花札、雑談ですごした。

8月13日 朝の味噌汁にうっかりダシを買い忘れてきたことに気づいた。仕方がない。しかしダシ抜き汁の味もまたオツなものだった。キャンプをしたおかげでこのことがわかった。今日は湧水付近道路拡張のため伐り開いた斜面裸地の植生など調べた。椎木に下ってから、川を渡って植物化石を採集したけれども保存がわるく十分な成果は見られなかった。時間に余裕もなかったので再来を期して小浦のバス停まで急いだ。

#### 植物班の記録

社叢中には、20m近いスギが高くそびえ、イタジイ、アカガシ、タブ、クスノキなどの高木が目立っていて、低木にヤツデ、ハクサンボク、シャシャンボ（以上常緑）、イヌビワ、キブシ、オオムラサキシキブ、マルバウツギ、クサギ（以上落葉樹）などが見られる。コクテンギ、ヒサカキ、ネムノキなどは果実をつけているが花のあるのはオオムラサキシキブ位である。社前に、ソテツ、タチバナ、アジサイが植えられている。

#### ○カワリバリュウビンタイ（写真4）

1972年11月3日、磯間山で本校山本英司先生が採集された葉変りのリュウビンタイ。葉は草羽状複生より二回羽状複生への移行を示し、側羽片の下部はいくらかの小羽片に分れている。頂羽片は殊にこの傾向が著しい。いずれも裸葉である。幼株から成株への移行型であるのかも知れないから今後観察を続けたい。

#### ○エノコログサで作ったイヌコロ（写真6）

エノコログサは、普通に見られる路傍や畑地の雑草で数種が区別される。写真のものは、キンエノコロで、花序にある剛毛は黄色で、1小穂下に数本束になっている。引きぬいた4本の穂で、こんなイヌコロを作って遊んだものと本校の城森先生が見本を作ってくださった。田舎の子供達は、昔からよく自然物から玩具を作って遊んだのであろうが、今はこんな遊びもすたれていくようだ。

<蝶の記録>

8月11日 野間神社までの登山道中目撃及び採集したチョウ

• ナミアゲハ…………… 卍 coll	• キチョウ…………… 卍 coll
• クロアゲハ…………… 卍 coll	• モンシロキチョウ… 卍 coll
• ナガサキアゲハ…+……2 coll	• コミスジ…………… 卍 coll
• モンキアゲハ……+……1 coll	• イチモンジチョウ… + coll
• アオスジアゲハ… 卍	• スミナガシ…………… + coll
• ツマグロヒョウモン… 卍	• サツマジジミ………… 卍 coll
	• ムラサキシジミ…… 卍 coll

道中キチョウが多数いたが、神社に近づくにつれて少なくなった。神社付近は、スミナガシが多数見られた。椎木から神社までの間でジャコウアゲハが1頭も発見できなかった。

8月12日

いよいよ本日は野間岳登山であったが、朝7時ごろ神社から、水のみ場付近までを歩いてみた。太陽は出ていたが、朝もやがかかって、爽快な山の気分を味わえた。神社から、4・50mはなれた所で、スミナガシを3頭発見した。きのうの夕ぐれにも数頭いたが同じ場所で、ある木のしるを吸っていた。またいっしょにクロヒカゲも吸水していた。

神社付近 午前7時～8時ごろまで 目撃

• スミナガシ	• ルリタテハ
• クロヒカゲ	• アサギマダラ

登山は、チョウ班が先に登った。途中はずっと山の中であったので、クロコノマチョウを1頭目撃しただけで、全然いなかった。木を切ったあとの切れ目から、遠くを見たが、アゲハを数頭みただけで他のチョウは見られなかった。やがて半分ほど登ったところで、木佐貫・浜川両先輩が登ってこられた。チョウについての知識不足など不安もあったが、先輩方の参加で力強くなった。山頂には、メスアカムラサキや、リュウキュウムラサキなど迷蝶がいるということで、ピッチを上げて上った。山頂では、下記のチョウを目撃採集した。中でも最大の収穫は、山本先生がメスアカムラサキを採集されたことであった。

山頂での目撃及び採集蝶

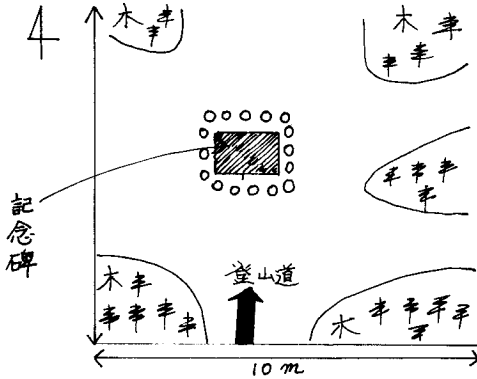
• キアゲハ	卍 coll	• ツマグロヒョウモン	♂だけ 卍 coll
• ナミアゲハ	+ coll	• イチモンジチョウ	+
• アオスジアゲハ	卍 coll	• アカタテハ	+ coll
• モンキアゲハ	卍 coll	• ヒメアカタテハ	卍
• クロアゲハ	+ coll	• <u>メスアカムラサキ</u>	2頭wit ♀ 1 coll
• アサギマダラ	卍 coll	• ヒメウラナミジャノメ	+
• ダイミョウセセリ	coll	• ヒメジャノメ	+
		• ウラナミシジミ	+ coll

昼食をとって植物の調査をしたのち、ちょうど登山道を登りきったところで、十分間に集まるチョウの記録をとってみた。

範囲……………木を切ったあとのひらけた所 10 m 平方

時間……………PM 2 : 00 ~ 2 : 10 の間 10 分間だけ

方法……………木佐貫、浜川両先輩と私の三人で、目撃した蝶を数える。



- |             |     |              |     |
|-------------|-----|--------------|-----|
| • アオスジアゲハ   | 5 頭 | • イチモンジチョウ   | 1 頭 |
| • モンキアゲハ    | 2 頭 | • ウラナミシジミ    | 3 頭 |
| • ツマグロヒョウモン | 4 頭 | • ヒメウラナミジャノメ | 1 頭 |

以上6種計16頭のチョウが飛来した。なるべく重複しないようにしたので、すべてべつべつのチョウである。観察していて気付いたことは、ツマグロヒョウモンが、♂だけ飛来したということと、なわばり争いが強いということであった。特にツマグロヒョウモンは強かった。

ウラナミシジミは交尾中であった。なお、ウラナミシジミ、ヒメウラナミジャノメ、ツマグロヒョウモン1頭は、いつも同じ場所において、この観察範囲から出て行かなかった。

8月13日

きょうは、下山する予定だったので、午前中に神社付近と、水のみ場の泉附近をもう1回観察して回った。太陽がキラキラと輝き暑った。きのうスミナガシがいた所には、アサギマダラとルリタテハがいたが、暑かったせいか、クロヒカゲ、スミナガシは出てきていなかった。泉附近は、アオスジアゲハが数頭飛来していた。またツマグロヒョウモンの♀が1頭自分のなわばりらしく、附近をずっと飛び回っていた。

下山途中は、登山の日と同じくキチョウが多数みられた。なお、檜木の所の谷川でウラギンシジミを1頭採集した。

8月25日(SUN) 晴

## — 第4回 川辺町禿どん山採集記 —

2年3組 南 洋子

参加者 佐方先生 山本先生、元山先生

2年 唐仁原俊哉 東 康子 南 洋子

1年 鮫島 泉

コース 加世田～知覧～厚地～松山～禿どん山～加世田

[植物班の記録]

茹るような暑さの中で、補講に、クラブに汗を流していたとある日曜日。今日は頭を冷やすために蛇紋岩地域の採集会に加わることにした。先生の話によると車で行けるということだったので、軽い気持ちで行ったのだが……。歩き始めた時からショックだった。ススキケ原の中をおしわけて小径を登る。すると体長3～4 cmもある変わった幼虫がたくさんコウゾの葉にぶら下がっていた。道は狭くて石がでこぼこでおまけにすべるので前に進みたくもなかった。気をとり直して進んでゆくと、こんどは胸をつくばかりの急な坂をあえぎながら登る。と、再びススキケ原になる。ここを通りぬけて木立の間をぬって進めば前方は開けて大小の岩石が禿山をつくっていた。これが蛇紋岩だった。たいへんきれいな岩石である。山本先生に聞くと次のようなことであった。蛇紋岩は地殻深部を構成している超塩基性岩が変質したもので蛇紋石や滑石が主とした組成鉱物である。一般にふか緑から緑をなし、淡緑色の部分は滑石が多くできているところである。深成岩に近いような岩石が地表に出ているということは、付近に大きな断層などがあり、この構造運動に伴って上昇してきたのだろう。そこで、植物の採集もした。伐採されていたので背の低い幼木や苗木のようなものしかなかった。イスノキ、ネムノキ、カンコノキ、サンショウ、ヒメユズリハ、クロガネモチ、アオモジ、コンテリギ、タブノキ、モッコク、ヤブムラサキ、オンツツジ、ヤブニッケイ、カクレミノ、などがあった。草花などには、ササクサ、フモトスマレ、ヒトツバ、サネカズラ、タツナミソウ、ススキ、キイチゴなどがあった。そこで昼食。あまりにも太陽が輝きすぎて皆のどが渴き、携帯した飲料水では足りなくなった。山水をくみ飲む。水があんなにおいしいとは思わなかった。皆それぞれ気に入った色や形の岩石を採取して下山する。途中唐仁原君のナップサックが破れる。岩石って重いんですよ。山本先生は、大きなのを1つ持ってサッサと下りてしまい、元山先生は、あの細い身体に反比例した量を持っていた。上りと同じコースを下る。皆何ごともなく元気(?)でしたが、再びここに来る人といえば、山本先生ぐらいのものでしょう。とにかく疲れまじた。そして、元山先生には、感服しました。さすが

きょうは出発の時は絶好の採集日よりであった。蛇紋岩発見が目的で知覧まで行ったのだったが山登りの時はいつも採集道具を忘れずに持って行くようにしていたので、いつものようにネットを振り回しながら登った。きょうは目的地をだれも知らなかったの、みんな付近を注意深く観察しながら目的となるらしい所を目ざした。途中杉林の中を通る時クロコノマチョウを多数目撃採集した。杉林を過ぎて山を伐採したあとのススキやチガヤなどのおい茂っている所で、コウゾの葉に多数のガの幼虫を見つけた。人が付近を通ると、体を大きくゆきぶりながら、人間に対する嫌悪の情を多分に見せつけているようで、木をゆするとポトポトと音をたてるように、つぎつぎと落ちて行った。やがて山頂に出て尾根づたいに行く。途中アゲハ、ツマグロヒョウモンが多数見られた。思ったより簡単に蛇紋岩を見つけることができた。目的地で昼食を食べる時、ムラサキツバメが一頭我々のまわりを飛び回っていた。また八瀬尾側の谷に水くみに下った時、ルリタテハを目撃、約20分ぐらい追いかけたが採集できなかった。帰りは大きな石をかかえながらもと来た道を帰った。来る時クロコノマチョウを採集した杉林の中でイシガケチョウを2頭目撃、しかしここでもネットを振り回しながら数分間追いかけたが、どうしてもとれなかった。残念な気がしてならない。空模様も悪くなったので、みんないそいで下った。林道の水たまりにはアゲハ、アオスジアゲハ、モンキアゲハが数頭吸水をしていた。

本日の目撃及び採集した蝶

採集

- クロコノマチョウ    ○ツマグロヒョウモン    ○アゲハ    ○キチョウ    ○モンシロチョウ
- アオスジアゲハ    ○クロアゲハ

目撃

上記採集以外に

- ルリタテハ    ○イシガケチョウ    ○ジャコウアゲハ    ○モンキアゲハ    ○キアゲハ
- ムラサキシジミ    ○ムラサキツバメ    ○サツマジジミ    ○ダイミョウセセリ    ○コミスジ

10月22日(SUN)くもり

— 第5回 採集記(金峰山) —

2年3組 南 洋子

参加者 佐方先生, 山本先生

2年 南 洋子

1年 市来 勝一郎

コース 加世田～大阪～金峰山～大阪～加世田  
坂 坂

本日はまったくの悪天候。「こんな日に山登りなどできるものか」という声を背にうけながらとぼとぼと駅に向かった。着いてみると、あの声のとおりに参加者は少なかった。いや少ないなんてものじゃない4人だったもの。おまけに私が、いえ、鹿児島交通加世田支社のおじさまが、時刻表(もちろんバスの)を間違えて……。ショック。結果として先生の車で行きました。昨年とは違い、林道みたいな所を8合目ぐらゐまで車で登る。そこは、大分開けた所(場所はわからない)で、はるか向こうに東シナ海の青い海。吹上浜の白い砂浜、うちよせる白い波、そして手前に広がる田園風景。それらが一望にみわたせました。ずっとそこに立っていたい気分だったけど、採集会だったし、風が強くて心の中まで木枯がふきぬけるようだったのであきらめて出発。雨が前日降っていたせい、道はたいへん悪かった。でも、木が高いせい、私の背が低いせい、風はふいてこなかった。この日は、人数が少なすぎたので神社の付近を重点的に調べた。なかでも多かったのは、サザンカ、アオキ、キジョランで安売りしているみたいだった。赤い実をつけたモッコク、黒実をつけたヤブニッケイ、碧色果のヤブミョウガ、黄色い葉をつけたイヌビワ、その他にトウゲシバ、エビネ、シロダモ、ハエドクソウ、ハマニンドウがあった。竹田神社で見なれているシイの大木もあった。シュスランの種もあった。そしてメクラグモの大群もいた。頂上に行こうとした時、鯨島君と相星君が登ってきた。合流して頂上へ。記念撮影の後、頂上付近の植物を調べる。ヒサカキ、ユズリハ、モッコク、ハクサンボク、マメツタ、ササクサ、シャシャンボ、赤い実をつけたコクテンギ、黄色の花をつけたツブブキ、そして木の幹がねじれているネジキ、などがあった。鯨島君達と別れて車の中で昼食をとる。後、車をおりて風にふかれながらの採集、キブシ、カラスザンショウ、エゴノキ、ネムノキ、ボタンヅル、シロダモ、ヤマザクラ、ヤブツバキ、カンコノキ、タケニグサ、花をつけたヒメアザミ、カナクギノキ、赤い莖のユズリハ、青い実をつけたトベラ、ハダカホウヅキは赤く、イガホウヅキは帯緑色の果実をつけている。紫の実をつけたムラサキシキブやムラサキシセンブリの花などを採集して帰路につく。4時頃加世田着。カゼはひいたし、くつはドロだらけになったが、また違った経験ができた。

12月17日 日曜日(くもり～晴れ)

## — 第6回 八重山採集記(薩摩郡入来町) —

2年 南 洋子

コース 加世田～伊集院一郡山一梨木野一雪元一八重山

参加者 佐方先生, 山本先生  
前田明子, 南 洋子

空は青く澄みわたり、白い雲が高くなびき、とても冬の日とは思えないくらいに晴れあがった今日。佐方先生と山本先生そして私達4人は、ここ八重山にやって来た。所々木もれ日のさすこの山は、いわゆる頂上というものが無いような連山になっている。まず、遠くに桜島を見ての記念写真を撮す。さて、ここに到着するまでの過程は次のとおりである。加世田を出発した私達は途中伊集院・郡山を経て雪元を通過したが、入来峠に出るために進路を変えることにした。梨木野まで来て珍しいものを見た。それは、脱穀のすんだ藁を、中央に1本の高い竹を軸にしてそえ木をし、台を作ってその上に積み重ねているものだった。そして、この作り方はこのあたりでも部落によって違わらしく、台を作らずに積み重ねてある所や、津貫などで見られるように家の形に積み重ねている所もあった。これは、母に聞いたところによると、田植えをする前に積み重ねておいたのを小さく切って肥料にするために作っているのだそうだ。ここでシロダモを採集す。最初である。それからUターンして東雪元へ向かう。そこから本格的に採集を始める。常緑樹のツバキ、赤い実をつけたサネカズラ、フウトウカズラ、青い実をつけたアオツツラフジなどである。そこで、この土地の人が畑仕事をしていたので、早速採集した植物の俗名を聞く。するとサネカズラはヒネカズラといい、シャンプーのかわりに使うと髪につやが出てくるのだそうだ。以前砂で髪を洗う話は聞いた事があるが、草で洗うのは初めて聞いた。昔の人は、たいした発見家である。それからの道は左右雑木林のようだった。カシの木やハゼ、ゴンズイ、イヌビワ、それに赤い実をつけたマユミもあった。植物には、キジョランや山オモトなどもあった。また、畑仕事をしている人に、この周辺での植物の方言を聞いてみた。するとクロガネはクロキというのだそうだ。さらに進んで八重山登山口へ急ぐ。山道のせいか凹凸がひどかった。登山口からは徒歩で頂上らしきところへ登る。道端に土の中にかくれていて、つつくと胞子をふくツチガキというかわった植物があった。雑木林の中には、ゴンズイ、ネジキ、トベラなどがあった。植栽された杉の中には、ツチトリモチ、ムサシアブミ、ツルリンドウ、エビネ、またオオノハナワラビ、アケボノソウ、ヤマオモト、トウゲヒバの群落などがあった。

ここまで来る途中に、牛の飼料にするというアオキの葉をたくさん背負っているおばさん二人と会った。(このようすは、写真を見て下さい)よくこれだけ背負えると思う位であった。日本



女性は強い！ 12時過ぎ、サザンカの白い花を前に昼食す。昼食後奥の方へ採集にゆく。ここで、悪臭とも言うべき臭をはなつ植物を採集す。アケボノソウだ。

帰路珍しい木の実を採る。峠を下る途中。小学校の先生だという一家が化石を採取しているのに出会う。山本先生が大喜びで探したけれど、結局見つからなかった。残念。入来温泉を通りスプライトを飲みながら帰路につく。途中は車の中で寝ていたため何も覚えていない。

1月21日(晴)

## —— 第7回 池田～池底採集記 ——

2年3組 弥勒菜穂子

参加者 佐方先生 山本先生  
2年 安富朱実 弥勒菜穂子

加世田を出発して、山本先生の車で川辺大橋から右折して、青戸に向かってからは道は聞き、聞き車を進めていった。ときおり梅の満開が見られ春のような感じがした。

10時10分、青戸小前、これより畑にだいこんが干しているのが見られ、冬の乾燥しきった青空に、よくマッチしており私たちの目をたのしませてくれた。

別府にはいると、黄色い菜の花畑が、まず目についた。青戸のあたりよりだいこん畑が多くなり、やはり山川漬の本場であるからだろうかと思わずにはいられないほどであった。

途中、両先生が、かもの羽を見つけられ、およそ長さは、20cmぐらいであり、コガモかカルガモかと思われる。

池底近くにくるとやはり暖かいのか、山あいの段々畑にれんげ草が咲いており、私たちがびっくりさせた。池田の手前、1kmぐらいの山あいで、車をとめて付辺を採集してみた。車の中からでは想像されそうもない、暗くて深い谷底が草木におおわれて見えない所にあり、おそらくそこはリュウビンの密生地であろうと、佐方先生はいわれたが、写真にとれず、残念そうであった。そこには、ムラサキシキブの紫色のまるい実はハダカホヅキの赤い実などがあり、色彩感豊かであった。鳥越トンネルをくぐって曲折した山道を下ると、やがて池田湖が眼下に見える。道路の左側にクストイゲの木があり、佐方先生の話によると、幹の下方にとげのあるとのことでした。山本先生が、確認のため行ったところ、たしかにあったそうだ。道の反対側にみかんの木があり、黄色い実がたくさんついていた。指宿スカイラインの料金所のところを曲り、車は池底をめざして進んだ。

小学校の3～4年生頃であろうか、女の子たちがやってくるのとぶつかり、池底への道を聞い

て、池田湖を右に見おろす道を登ってゆくと、車のかずも少なくなり、道幅も狭くなった。途中耕運機とはち合わせしそうになり、私たちは車を降りて後退した。このときわかったのだが、日ごろ私たちに、前の方の運転には絶対の自信があるといわれていた山本先生も、さすがにこのときばかりはまいったようである。

池崎の手前1 km ぐらいでまたもや耕運機と出会ってしまい、その場所にとどまることにした。そこには、ちょうどペンペン草があり、ひよっとすると、ヤリ型もあるのではないかとさがしてみたが、むだであった。途中で道が分かれており、1人が左の方がよいのではないかと提案したため、左の方進んでみるとそこは指宿方面の道であった。ひき返して大きな坂を登り、下ってまた登るとそこが池底であった。たいへん静かで自動車の音もきこえず世間から孤立しているのではないかと思われた。下の田んぼの方へ降りて昼食をとった。食後一軒の農家を訪ねて土地のことを聞いた。しかし期待していたものが十分得られず、2時30分、池底を出発し加世田へ向う。

園芸メモ(1972年4月～1973年3月)

1年 鮫島 泉

[4月]

- 12日 カーネーションの定植
- 15日 ワスレナグサ, デージー  
ペチュニアの定植
- 25日 苗床作り, 球根集め
- 26日 フリージアの球根貯蔵
- 28日 サルビア, 紅撫子, 千日紅  
マリーゴールド, 中輪百日草の  
種まき

[5月]

- 2日 イヌザンショウ, サンショウ  
オキナグサ, キキョウラン  
イワヒバの定植
- 3日 千日紅, ツクバネアサガオ  
コリウスの種まき
- 12日 チューリップの球根の採取
- 13日 ハナビシソウの抜き取り
- 15日 ハナビシソウ, キンセンカの  
抜き取り
- 16日 ホウセンカの定植  
グビジンソウ, レナンキュラスの  
抜き取り
- 20日 マリーゴールド, サルビアの苗の  
購入
- 27日 アサガオ, マリーゴールドの種ま  
き  
トウモロコシ(長品230白色在  
来)まく(4号花園)  
ホウセンカの定植
- 31日 アサガオの鉢植え

[6月]

- 3日 マリーゴールド, コスモスの定植
- 6日 マリーゴールドの移植  
トウモロコシ(黒色, ブラックメキ  
シカン)4号花園
- 9日 千日紅, 百日草, マリーゴールド  
オシロイバナの定植
- 10日 マリーゴールド, 千日紅, アサガオ  
オシロイバナの定植
- 13日 コスモスの定植  
補植用トウモロコシ(鉢植え)  
8本発芽
- 16日 千日紅の定植
- 17日 実験用トウモロコシ10本定植
- 19日 肥料まき
- 20日 ツクバネアサガオの定植
- 21日 サルビアの定植, 除草
- 23日 除草, 中耕
- 24日 中耕
- 26日 コリウス, コスモスの定植

[7月]

- 8日 トウモロコシに肥料を与える
- 14日 トウモロコシ(白色)6本出穂
- 18日 トウモロコシ(黒色)10本出穂  
コリウスの定植
- 21日 トウモロコシ(白色)の穂を3本  
抜く(♀は出ていない)  
トウモロコシ台風のため5本おれる
- 22日 サルビアの定植(国体用300本)

- 24日 トウモロコシ(白色♀)4本 [12月]  
(黒色♀)1本出穂 12日 ヤグルマソウ, パンジーの移植
- 26日 トウモロコシ(黒色)1本 16日 キンセンカ, デージーの移植  
(白色)1本折れる (1号花園, 2号花園)
- 27日 トウモロコシ(黒色♀)1本出穂 23日 デージー, キンセンカの定植  
トウモロコシ(黒色)14本 26日 キンギョソウの移植  
(白色)16本健在
- 29日 サルビアの定植 [1月]  
13日 除草, 肥料まき, 水まき
- [9月] 30日 肥料まき, 水まき
- 5日 トウモロコシを抜く, 水まき
- 9日 トウモロコシの種子調査 [3月]
- 月末 A園の中のクロマツがマツクイム 22日 シダ, その他の定植  
シにより枯れる
- [10月]
- 28日 グビジソウ, ハナビソウ  
ルピナス, ナデシコ, デージー  
ヤグルマソウ, セキチクの種まき
- 30日 セキチク, ナデシコの種まき
- [11月]
- 2日 スィートピーの種まき 1号花園  
葉変り(リュウビンタイ)の鉢植  
え
- 4日 ゴテチア, パンジー, キンギョソ  
ウ, レナンキュラス, チューリッ  
プ, スターフロックスの種まき
- 11日 苗床の種まき
- 13日 レナンキュラスの定植, 水まき
- 22日 レナンキュラス, スィートピーの  
定植(1号花園), 水まき

## 植物花ごよみ

## 1972年

- 4.14 ナツメ・ニセアカシア発芽 クヌギ満開  
 15 グビジンソウ開花  
 19 ハナビシソウ満開  
 20 ビロウ・フジ満開  
 21 センダン・ネム発芽  
 シャリンバイ・コマユミ・オガムラサキ・  
 ハクサンボク・トウカエデ・ウツギ・コデ  
 マリ・イスノキ・ムラサキツクサ・エビ満開  
 トウモクレン終花  
 25 グビジンソウ満開  
 27 スターフロックス満開  
 28 アマリリス出芽 ナデシコ満開  
 ルピナス開花  
 29 デライトセキチク・ガマズミ開花  
 5. 1 スィートピー満開  
 2 ザクロ発芽・トウオガタマ満開  
 ガーベラ開花(ボケ花あり)  
 カスミソウ満開・キンセンカ終花  
 3 バラ・ニワゼキショウ開花  
 4 センダンノキ開花・ガマズミ満開  
 6 サツキ・アマリリス開花  
 8 マキバブラシノキ開花  
 10 ザクロ・ノアザミ開花  
 15 タイサンボク・ハクサンボク・ガマズミ  
 ・ボケ終花  
 18 ヤブジラミ・コモチマンネングサ開花  
 チガヤ出穂 サクランボ結実  
 19 マキバブラシノキ・サツキ満開  
 20 チシャノキ開花 センダン満開  
 23 アジサイ開花  
 27 クチナシ満開  
 29 ダリア・ウツボグサ開花  
 30 ヤグルマソウ終花 ヤワラハチジョウシダ胞子着  
 6. 2 サングジュ花・アメリカデイゴ・サング  
 シトウ開花  
 5 ムラサキツクサ花あり  
 6 ハナツクバネウツギ開花  
 7 ハイビスカス(八重)開花  
 8 チシャノキ満開 キョウチクトウ開花  
 12 ミヤギノハギ・ナツメ開花  
 13 トキワススキ出穂・トゲソバ開花  
 テリハノイバラ満開  
 14 ネムノキ・ホウセンカ・オリヅルラン開  
 花 アジサイ満開

- 6.15 サツキ終花  
 19 ソクズ開花  
 21 ハイビスカス満開  
 26 ネムノキ満開  
 30 トウオガタマ開花 エリカ満開  
 7. 7 タラノキ開花  
 10 アオギリ・ノウゼンカズラ開花  
 11 千日紅開花 ハナツクバネウツギ満開  
 8.  
 9. 4 ツルボ・ヒガンバナ開花  
 8 サンズビエラ開花(金峰町, 南日本新聞)  
 10. 8 ヒメヤマアザミ花(冠岳)  
 29 リンドウ花(磯間山)  
 11. 1 記念クロマツ松食虫で枯死(A園)  
 3 フェイジョア果実(川畑)  
 15 サクラ・シンジュ・ニセアカシア落葉多  
 し  
 12. 4 ユキヤナギ開花  
 11 ツバキ開花

## 1973年

- 1.13 ボケ発芽  
 24 ボケ開花  
 2. 3 ラップスイセン・ブンゴウメ開花  
 ボケ満開  
 10 ムラサキケマン・ミミナグサ開花  
 17 ヤシヤブシ雄花多数落下  
 18 キブシ満開(蔵多山)  
 25 ギョボクすっかり落葉(秋目)  
 アブラナ・キブシ満開  
 3.22 タガラシ・キツネノボタン満開  
 24 ヤマザクラ満開  
 26 スィートピー開花  
 28 スギナ(加世田川土堤)多い  
 フリージア満開 チュウリップ開花  
 レナンキュラス開花

# 動物採集観察記

## 1972年

4.15 ヒメオドシチョウの孵化(約180)

18 ツバメの飛来

20 ヒオドシチョウ 死亡するもの多し

23 ミカドアゲハ }  
 コミスジ } 竹田神社にて目撃  
 ツマグロヒョウモン }  
 ナガサキアゲハ }  
 アサギマダラ } 久志にて捕獲  
 クロコノマ }

24 モンキアゲハ 校内にて目撃

28 ヒオドシチョウ(62頭)が3令

5.15 モンシロチョウ }  
 コミスジ } を目撃  
 ジャノメシジミ }  
 キタテハ }

19 ゲンジボタル(4頭)捕獲

20 ヒオドシチョウの羽化

マイマイカブリを捕獲

コムラサキ(2頭)捕獲

22 ヒオドシチョウ(40頭)放す

6. 4 ツマベニチョウ多数秋目にて目撃  
 幼虫(1令・2令・3令・終令)

6 シロスジカミキリ(成虫)捕獲

7 ツマベニチョウの蛹化

12 コガネムシ }  
 アシナガグモ } を捕獲  
 ササグモ }  
 チゲモ }

15 6月15日~7月10日までネムノキ  
 に飛来するチョウの調査

22 チュウガタシロガネグモ捕獲

7. 7 アサギマダラ(1頭)捕獲

14 ツマベニチョウの羽化

15 アサギマダラ }  
 アオバセセリ } を竹田神社にて目撃  
 クロヒカゲ }

16 ツマベニチョウの羽化

24 ゴマダラチョウを目撃

26 アブラゼミの飛来

8. 3 交尾中のガを捕獲

25 イシガケチョウ }  
 ルリタテハ } を知覧にて捕獲

10.29 アサギマダラ }  
 ウラギンシジミ } 磯間山にて捕獲  
 ヒメアカタテハ }  
 ムラサキツバメ }

11.12 クロコノマチョウを万世にて目撃

15 校内にセキレイ多数飛来

21 校内にセキレイ多数飛来

12.23 ウスイロコノマ万世にて目撃

## 1973年

2.24 ツバメ多数目撃

3.10 モンシロチョウ 益山にて目撃

18 ツマキチョウ捕獲, モンシロチョウ・  
 サツマシジミ久志にて目撃

19 キチョウ・モンシロチョウを大浦にて  
 目撃

24 校内にツグミ2羽飛来

26 モンシロチョウが多数見られるよう  
 になった。

27 ツマグロヒョウモン益山にて目撃

28 ツマキチョウ・ジャコウアゲハを小湊  
 ・大浦にて目撃

31 ツマキチョウ・ジャコウアゲハを小湊  
 にて目撃 ジャコウアゲハ捕獲

# 生物部名簿（1973年3月現在）

顧問 佐方敏男 山本英司

## 〔3年〕

神野辰郎	日置郡金峰町宮崎768
木佐貫彰	加世田市宮原2226
浜川睦文	加世田市小湊431
平山智章	日置郡吹上町中原2605
本坊徳光	加世田市唐仁原3286
阿久根美智代	加世田市小湊
金竹美代子	加世田市益山8829
篠原紀久子	日置郡吹上町中原3081
宮野絹代	日置郡吹上町湯之浦1770の2
森田睦美	加世田市武田17664

## 〔2年〕

宮原康展	加世田市武田17734
奥真理子	日置郡金峰町宮崎2929
木戸真理子	加世田市本町7の4
東康子	加世田市本町17の1
南洋子	加世田市村原2285
前田明子	日置郡金峰町新山1691
弥勒菜穂子	日置郡金峰町宮崎3542
安富朱美	日置郡金峰町宮崎3

## 〔1年〕

鮫島泉	加世田市小湊40
市来勝一郎	加世田市武田17884

## 編 集 後 記

「まのせ」も今年で10才になりました。危ぶまれながらも無事発行できることをたいへん嬉しく思います。

女子中心の部員全員が観察し、研究し、記録してきたものばかりです。野間岳の合宿での炊事の苦勞や、山水のおいしさ、八瀬尾の滝の涼しさ、亀ヶ丘の景色のすばらしさも今では楽しい思い出となりました。

最後に「まのせ10号」編集にあたり、顧問の先生方及び諸先輩の方々の御協力に深く感謝します。しかし、原稿の整備が思いのほか遅れてしまい、それに石油危機から物価の狂騰による悪影響も加わって印刷費は高くなり、泣き面にハチといった感じで発行がこんなに遅れて何ともすまなく思っております。

2 年 南 洋 子



## 俗説薩隅植物誌(5)

佐方敏男

筆者が「南薩の植物」を発表してから10年たった。その間、「加世田近傍の植物方言」〔「加世田第2号」〕や本編(1)~(4)で若干の追補をしたが、其後集まった方言名などを中心に、書き足りなかったことを記してみたい。

5-(1)アクッソ(モクタチバナ) — 笠沙町の海岸近い山に見られる常緑樹、黒瀬勇さんの話では、周囲1m以上のものもある。宇治群島に多い木で白小花を開き果実は紫熟する。はじめはしぶく後甘味があって食べられる。枝は折れ易く葉は厚く長形でフツイの葉に似ている。自在鍵のカギを通す板に用いたり、播こぎに作ったりした。という。アグソとも言う。同町大当では、八朔節にこの実を食べぬと蛆になるという(田神フヂさん)。シャリンバイを志州(志摩)でウジコロシという〔物品識名拾遺121丁〕のとの関係がありそうである。黒瀬でもアクソの実を食べるが、核が大きいので皮をスワブル(しゃぶる)のだという。また同町谷山で聞いた所では、子供はこの実を竹鉄砲の弾丸にして遊ぶこともあるが、木は舟を陸揚げする時下瓦として用いることもあるという。加世田名勝志帳の果類中、山桃に次いでアクチの名がみえる。

5-(2)アマンノハナ(ムラサキカタバミ) — アマングサというのは、普通のカタバミの方言で吹上町で聞いたが、アマンノハナの名は秋目(坊津町)でそう言っていたと教えられた(川上美和子さん)。ハナが美しいからであろう。筆者がこの花に心を引かれたのは、中学時代(大正14年)鹿児島市の武町の母の実家の庭であったが、最近では諸所に広がり珍らしくないどころか、畑地に侵入して厄介視される程になった。この花は、花は咲けども実はできぬ生殖能力のない飾花であるが八重花ではない。カタバミは稀に八重花が見つかる〔あふち10号(1958)〕。アマンというのは、酔のことでアマン酔之助の一口話を思い出させる名前である。

5-(3)アマンソ(ギョボク) — 野間半島黒瀬付近での方言でイカの餌木に使う木として珍重する(黒瀬勇氏)。釣の名人は、餌木毎に名前を附し、天候時刻別に依じて使いわけするのだそうである。この木はまた愛蝶家の間でも美蝶として知られているツマベニチョウの食樹としてその分布が注目されているが、薩隅共に南部の海岸沿いの地に極限され、個体数も少ない〔福田、田中氏鹿児島県の蝶類105頁〕。果実は漿果にして楕円形をなし黒色なり琉球にては此実を餌として魚を釣るのに使う故にギョボク(魚木)の名ありと云う〔日本百科大辞典3〕と記され、斉田佐藤氏内外植物誌(1916)も此を踏襲しているが、琉球及び台湾では小魚の型を作って漁獲に用いている。又同書に花初めは白く後黄色になるとあるのに台湾植物図説(1927)には花ハ始メ黄緑ニテ後チ紫色ニ変シ、果皮粗糙ニテ白点密布シ紅熟シ云々とある。魚木の種小名は近来ファルカタが用いられるが、ヘムズレイなどは之をレリギオサの1品ならんとしている。(1886)ドカンドルに依ればファルカタはおしべ12~16本、レリギオサは20~28本としてある。後者は印度などでは林をモデル、ドラムや黒板に用いられるが虫に弱く耐久性乏しい。

材

5-(4)アカユリ(オニユリ, コオニユリ) — 野間半島の大当で、アカユリに2種類があった。1つは木が少なく花が多いが、他は木がなよなよしているときいた。長島の指江では、アカユリは上の葉の所に黒い実ができる。このユリの花の咲く頃粟をつくるという。また、知覧町ニッ谷では、ヤマユリというのがオニユリのことで、ノユリというのはノヒメユリで草生地に生えるといふ、カノコユリのことをトユリといって根は苦いと教えられた。トユリはドユユイ(土用ユリ内山田)の訛ったものか。額娃町の谷場ではオニユリをヤマユリといい、カノコユリをオニユリだといってきかぬので念を押して問い正した所、裏庭からこれだよと、その家の主人が果実付のカノコユリを持ってきて下さったので確信を得た。カノコユリの名は花壇綱目(1682)にも大鹿子百合と共に出ているが、このユリの学名が付いたのは1794年のことで、日本名をカスピアコ、コノコユリ、コーレイユリと書いている。初頭の名は勿論、鹿子百合の漢字読みなのであろう。吹上地方(南薩)にアワユリという名があって、この花の咲く頃粟を植えよというのは、カノコユリのことか?オニユリのことか?カノコユリの花期は、オニユリより長く盛夏に及ぶ。笠沙町大当でもカノコユリをオニユリと言っている。

5-(5)イソズラシ(ハマビワ) — 海岸近い林中に多い。笠沙町谷山では、イソズラともきいた。材は黄色でシモジなど作るという。この植物は、ツンベルグが新植物として発表後注目されずジャワの植物園に移入され(1827)ここを経てオランダに輸入(1837)されたらしいとシーボルトは書き、また生育地に因んだ日本名を正しくハマビワと記している。その後殆んど40年を経て、フランシュー等はハマビワの名をのせているのは誤植の結果か。南薩ではバカビワ(加世田など)とさげすまれているほど有用樹ではないらしい。

5-(6)イブシ(サンゴジュ) — 笠沙町谷山部落は野間岳、麓の谷間の村で山傾面の段々畑のすそを流れる小川沿いに、サンゴジュの茂みが目立っている。そこに住みついで六代目という谷山重夫さんは、この木をイブシと呼んでおられた。大隅でもイブスノキ、山口県(祝島)ではイボシという由〔山口県植物誌〕。サンゴジュはまたキサンゴともいう〔大和〕が、草珊瑚は和名センリョウウ〔本草正論2〕という別植物にあてている。サンゴジュは挿木しやすい樹である。終戦後2~3年のことこの直幹(直径5~6cm)を根元を近くで伐り長さ2m余にし、上部に又枝を付けたまま、裏庭に立て物干竿を架ける又木の支柱としておいた。所が翌年には、芽をふいで活着してしまったのである。こんな大きな挿木になろうとは予期もしなかったことである。良安は、珊瑚樹をさんごじゅのきと仮名書きし、三四月細小花作簇結子似冬青子而赤と記し、次に、権萃(ごんずい)木葉子共似珊瑚樹而房稍長関東多有〔和漢三才84〕を出している。

5-(7)ウキンノハナ(カンナ) — 筆者小学生の頃、自庭の青梨の高木の下あたりに、大きな葉で真赤な花の草が群生していた。名前は知らなかったが、ずっと後になって、これがウキンノハナと呼ばれていたことがわかった。別にツツグサ(葉がうすいた代用にするから)、ハナバシヨ(吹上町)、バラハナ(葉がハランに似て花が著しい)などいわれる。クマタケランの越冬する笠沙方面では、葉がこれに似て花が美しいので、サレンパバナ(黒瀬など)とも言われる。さて我国古渡のカンナは、だんどくせんの名で知られ、花赤白薄色あり豊後百合とも云〔花

壇綱目中(1664)と記されている。檀特山(北インド)は仏陀苦行の地といわれる所で、この地由来の花というのであろう。その後、だんどく、くれない也葉はせをのちさきもの〔花地4, 5〕。檀特花、美人蕉の類なるべし寒をおそる〔花譜中〕など出ている。而して前掲書6巻には、種は二月ニまく小刀ニて皮を少けづりてよし其まゝハはへにくき物なりと種子の予措法が記されている。上の美人蕉(ビジンショウ)は今名ヒメバショウというバナナ属の別植物であるが、支那の本では、カンナにこの名を用いているのがある。〔種子植物名称(1954)〕。本草綱目15巻湿草類に、紅蕉葉瘦類蘆若色正紅如榴花日一兩葉其中有一点鮮緑可愛春開至秋冬猶芳俗名美人蕉とあって、この植物の皮中から取り出した蕉油は火傷の薬になり、また梳頭止女人髪落令長而黒などの効用が記してある。我国でも上記を引用し、尚、花のうつくしきとてびぢんせうといふといへともしからず此葉をせんじ女中髪をあらふニけを長くしてくるからしむ……葉をくるやきにしてカミの油にぬり髪のはげたる所にぬりてけをせうす其しるしばせうにすぐれたるとて名付よし誠に女ハ髪のためだからんこそ人のためたつべかめりといへば美人蕉と呼ぶもにくからずと記しこの名の由来としている本がある〔増地7〕。しかし筆者はこの美花が山川方面の墓地の供花になっていたのが強く印象づけられて思い出される。

5-(8)ウメズ(リンボク) — 葉は幼木では鋭鋸歯が著しいが成木では全辺光沢があり固い。シーボルト等が新学名をつける時も葉状の特色を以て種小名として、総状花序は腋出単一、葉の半長で20~25花を付けると記し、果実の記載はない〔自然分科日本植物誌Ⅱ33(1843)〕和名リンボクは、檜木にあやまり当てた名という。檜木とはどんな木か。本草綱目に依れば、生江南深山大樹有数種取葉厚大白花者入葉白餘灰入染家。時珍曰、此木最硬梓人謂之樹筋木是也木入染縫用葉亦可釀酒と記し、積名樟木音潭としている。薬用として、一名樟灰本經汗於病者床下布之勿令病人知也と。リンボクは確かに檜木でない。蘭山も詳かならずとしている。〔重訂31(1847)〕。多識篇の著者も檜木はよくわからなかったとみえ、唯リンと振仮名を附しているだけである。葉形にもとづいたヒヒラギ系の方言名と、樹の性質、用途によってつけられたタデ系の方言とがある。ヤマタデ(北薩八重山など)の他ウメズ(堀切山)というのを聞いたがその由来はきけなかった。檜木は、漢渡りの蛇木ト云物はナルヘシ(本草正論6)ともいう。(1776)。

5-(9)オナゴタマタシ(ヤナギイチゴ) — タマタシというのは、笠沙町の方言でハドノキのことである。之に似て、葉が長形で裏の白い低木で小形のイチゴを思わせる果実をつけるヤナギイチゴを同町谷山などでオナゴタマタシの名で区別しているが、大浦町大木場などでは、オトコタマタシという。ここではハドノキをタダシバと言っている。然るに薩摩半島南東端の開聞町では、ヤナギイチゴをシロハドと称し子供らは生果を食べたりする。この植物をはじめて学界に発表するに際し、シーボルトは、不完全な標本と滞日中の写生図(雌花と果実)を基にして敢て新属モロカルプス(桑の実を意味する)を打ち建てたのである。因みに、ハドノキの方言は上記の他カンワタシ、カンワタイノキ(笠沙町椎木)、タカダンシバ(大浦町)などあり牛の好飼料。

5-⑩ウイガンノハ(ナンバンキブシ) — 早春他樹に先だって裸枝に淡黄の総状花房を数多下垂して山径を活気づけてくれる低木の一つだ。幼木や徒長枝には枝先に葉を落さず紅変した葉をまじえて越冬しているものもある。ウイガンノハとは、牛が食べる葉のことだと、野間岳下腹の檜木部落で教えてもらった。加世田市内山田田頭に、ウイメダと言う名で、牛がよく食べ、昔は菌染めに用いたという木があるときいた。はじめ、フシノキと思ったが、後キブシとも考えられ未だに決しかねている。このキブシには、前にも記した通り、フタタキ、ナベトイノツなどの名があるが、前者は火たたき(火はたき)かと推論の域を出ず、また後者の語源も確認されないが、案外単純な事実や想像に由った名に違いない。この木は白い髓がきわだって大きいのでこれを集めてマリのしんに使ったため、マイボシン(知覧町、穎娃町の山間など)とも呼ばれている。この木をはじめて発表したシーボルトはこの花の不快な香いを気にしている。

5-⑪インギー(イイギリ) — 日置郡吹上町でこの方言の樹木があるが何種かはっきりせずアブラギリ(時に栽培がみられる)ではないかと疑いを残したままになっていた。イイギリかも知れぬが、この木はこちらでは見たことがないので疑わしい。土井氏の有名な薩摩植物誌をみても日置郡内には自生はない。そこで筆者は、インギーが鉄山(加世田市)にあることを報じた際にはアブラギリ?としておいた(1967年)が1971年、鉄山を経て山道を蔵多山へ登る山中でたまたまイイギリの野生を見、疑問のインギーの正体はこれと確認できたので、ここで謹んで訂正したい。この樹は露国マキシモウイチにより1866年をはじめて知らされ新学名がつけられた。属名イデシアは、支那旅行記(1704年)の著者名より採ったと記している。伊比桐葉似桐類而非桐属また葉似菜盛葉而略長春開小白花秋結子作房如南天子而大内有黒細子阿州和州山中有之移栽庭園甚美也然人家希見之〔和漢三才84〕。園芸品種種葉品や班入品が知られている。

5-⑫カライノハンメノツ(オガタモノキ) — 吹上町和田には、面白い植物方言があるがこれもその1つである。同町中和田の脇政吉さんがこの呼名の果実付の枝をわざわざ拙宅まで届けて下さって、はじめてオガタモノキと判明した。脇さんは、本植物誌(1)に記したアッピーオイエの行事なども教えて下さった方である。改めて御好意を謝したい。大木になるこの木の種実をみて鳥の飯米の木と呼んだのであろう。四国高知で、カラスモモの名があるのと共通した見方である。岡玉ノ木薩州ニママアリ、俗ニダイシ香ト云、又大師木ト云、木ハ樟木ニ能似テ大者数畝ニ至ルモノナリ……二三月頃花ヲ開ク、大サ梅花ノ如ク形辛夷ノ如ク白色ニシテ少紅色ヲ帯ブ色蓮ニ似タリ結子油ヲ取り蠟トス……〔西州木状一白井氏による〕。この木の堅さを表わす方言名として、笠沙では、カシクレという所があると吹上町の故戸越佐太郎翁にきいたことがある。堅いカシノキよりまだそれ以上に堅いの意である。大浦ではカタガンという由(徳永真氏)。

5-⑬カゼクサ(ササキビ) — 笠沙町赤生木のバス停に近い谷間は、天然記念物ヘゴの生育地であるが、ササキビなども見られる。同地の米菊ばあさんは、腰こそ曲っておられたが、極めてお元気で、ヘゴの説明やカゼクサの話をかきかして下さった。この葉先にある横の折目の数はその年内に襲来する大風の回数をあらわしているのでカゼクサというのだそうである。ササキビ

の葉を見ると成程、帯状の横線（折目）がある。倉田悟氏に依れば、屋久島の宮之浦ではカザクサといい葉基から葉先までのこの横線の位置により台風の月（時期）を占んでいるというのである（植物と民俗43頁）。草木の細かい所までよく気づいてそれを人間生活の何れかの面にとり入れた昔の人の素朴さがよくあらわれている。嘗てアカメガシワの方言名をきいた時、葉身の基部の蜜腺をさして、これをトノサマンメンタマ（殿様の眼玉）というのだとつけ加えて教えてくれた農家のおばさんがあった（額娃町）。普通の植物図鑑にはこの蜜腺のことは書かれてない。ツンベルグ、シーボルトの図説共に蜜腺の記載はない。有名な牧野図鑑亦然り。然し雪吹氏は、主要蜜腺即ち上記トノサマンメンタマを図示し、是等蜜腺の周曲は、凡て赤色の輪状部を以て包まれ凹陷して蜜槽をなせり〔植物と昆虫との関係（1903）144頁〕と記している。さて金峰町白川などでは、オヒシバをカゼクサと呼び、この草の分岐した穂の数ほど年内に台風があると言い伝えているという。また、知風草、俗ニ其クキニ節アレハ其年大風フク本ニアレバ春フク中ニアレバ夏秋フク末ニアレバ冬フクニ節アレハ二度フク節ナケレバ其年大風フカスト云〔大和9の16～17〕としてこの草名をチカラクサとした本がある。更にトウモロコシについてこんな記述がある。今俗所謂南蛮黍之根節出地者高則其年必有大風、出地者低則其年必無風予来誠之然蜜根有節節上有細根如髮而着土着也（本朝食鑑）（1695）。大風占いに、種類こそ違え、ササキビ、オヒシバ、チカラクサ、トウモロコシなどイネ科草本が用いられているのは興味深いことである。笠沙では、ササキビをサヤサヤクサやサラサラクサといい牛に食べさせたり、笹舟にしたりして遊ぶが、飼料としては少しかたいという（黒瀬）。

5-14 キンギンクサ（マツバラシ） — 最古のシダ植物として知られているこの特異なシダの子のうの黄色及び胞子の黄白色をキンギンにたとえた名称で川辺町でいわれるときいた。大浦町ではアワランという。之も子のうの性状に基づいた名称である。加世田市鉄山方面にも野生するが名前はきかれなかった。大浦などでは、稀に樹上に着生させたりして觀賞する好事家もあるが、ササラン（セキコダ）ほど一般的ではない。川辺町清水の磨崖仏の岩の割目にも見られる。

5-15 コヤイノック（エゴノキ） — エゴノキは5月上旬より梅花のような白い長梗の花房を数多下垂して極だつて美しい落葉低木である。花後小果は長円または球形であつて果皮は細毛でおおわれている。よく枝端にムシコブを生することがあつて珍らしがつて採集したりする。これがネコアシフシである。コヤイノック（内山田など）、コヤス（堀切山）、ドクロノック（川辺）ドツツシノック（赤生木）などの呼名がある。猫の趾指に似たネコアシフシは、シーボルトも新学名発表の際、見逃がさず図示しているが和名はチシャノキとしてある。フランシェー等は、チマノキとよまれる名を記している。コヤスの名は、加世田名勝志帳中にもでている。奄美大島でも同名で呼ぶが肥料になる故の名だろうと初島先生（当時鹿大教授）は話されたことがある（1964年7月4日）。ドクロノックは、ロクロノキの訛りでこの地方ではロをド、ラをダとなまる。然し反対の場合、例えばドカンスイグを訛ってロバンスイグという如きその不安定さを示している。ドツツシノックの名と、この実を川に流がすときいた時、ドツツシというのは白蟻の方言でもあるので念を押ししたが之には関係なくただ毒の木の意味らしかった。エゴノキは、シナにも

分布し野菜類の名で知られている。

5-(10) ザツシビンヒッカケ(センニンソウ) — 吹上町和田方面でいわれる名で由来がわからない。ザツシビンヒッカケともきいたが、これが本家かも知れない。道端の草むらなどにまといつているのも多く盛夏白花はきわだって美しく見える。冬もくすんだ緑色に白條をばかした葉を交えてこのつるの存在を示している。有毒植物の一つでかむと辛味がある。座頭小便ひっかけの意であると82才になる同地の梶いさんは考えている。いずれにしても何故このつる植物に座頭を配したのか知りたいものである。救荒本草の大蓼がこの植物だとして、俗名仙人草又馬ノハコボシ武州近辺ニアリ山野共ニ生ズ筑前ニテタカタテト云蔓草也三枝九葉也秋ニ至テ四弁白花ヲ開ク形風鈴草の如シ花後白頭翁ノ如クナル綿アリ筑前土人辣ヲ好シテ食フ生ニテハ不食塩ニテモミ食フ反テ齒ヲカタメルトナン塩ガヨキモノ然関東ニテハ不食〔約之紀聞8〕。笠沙町谷山では、タカタツカズラといっている。ダンマカズラ(内布)、ウシノハツッカゲ(日吉、吹上町)、ウマンハツッカゲ(日吉、吹上、金峰町)、ウマンハオレ(知覧町)などの名もある。このつるを鎌で切れば、は(刃)がきれなくなるというのは、牛馬の歯コボレの意を鎌のハマで拡大して考えたのであろうか(和田など)。このセンニンソウは、ツンベルグが新学名発表(1793年)の時、日本名イカリソウとしている。葉状を三枝九葉にみたてたための名であらう。しかし花は全く別物である。同属ハンショウズル発表に際し、日本名はカラタテ、タカタテ、カザグルマ、センニンソウの四名が連記してある。どうしてこう念の入った誤りを記したのであろうか。

5-(11) サンキラ(サツマサンキライ) — 開聞岳西部麓でサツマサンキライとサルトリイバラを区別して後者は、クワクワラ、前者はサンキラ(山帰来)と呼ばれているが、人によってはハマサルトリイバラを指してサンキラとすることもある。サンキラは、海岸近くにあつて長形葉でとげが多い。笠沙町姥でもこの名で呼び、坊津町久志では、磯にあるのはとげがないという。ここではサンキラを2種区別しているわけであるが、2種共クワクワラ(サルトリイバラ)のように団子用とはしないという。とげがないというのは、葉が円く、黒色小形の球果をつけるハマサルトリイバラのことであらう。笠沙町大当では、オトコカカラはむした時、香いがないので団子は包まないが、オナゴカカラは、葉が小さく、むした時香いがあるのでカカラダゴを作ると主婦の田神さんは話してくれた。オトコカカラはハマサルトリイバラのことであらう。サツマサンキライは、19世紀半、日本では薩摩においてはじめて採集され標本が新種としてグレーにより発表されている。

5-(12) ダレイッゴ(ナワシロイチゴ) — ナワシロイチゴは最も普通に路傍にもみられるのでアシモトイチゴ(笠沙谷山他)とも云われ、暗赤色の果は「1穂五六子他莓ヨリ粒大ニシテ穂小」6月頃熟するのでタウエイッゴ(吹上、川辺他)とも呼ばれている。本草の藤田薫に当てられてきたが、時珍は開小白花と書いているので同一種とは言えない。この文中で、此類凡五種予嘗親采以爾雅所列者校之始得其的諸家所説皆未可信也と自信のほどを示している。名実図考19に、紅梅消(江西呼称)の名で図解があり、重修本(1884)では、ナハシロイチゴとルビ

がついている。この根を浸酒して薬にし、また取花汁入粉ソバカスを去るべしとある。而して似  
藤田燕……三月間開小粉紅花色似紅梅不甚開放下有綠蒂……とも記している。この図考の  
著者は、イチゴ属は甚だ多く、李時珍も亦いまだ尽く考究していないので紅花のものがあること  
に言及していないと一筆書いている。これより前、我国では本草正正訛(山岡蒞安1778年)  
でもイチゴの条下で、凡莓ノ属吾邦所在十余品逐一銘シ難シ。時珍、僅五品ヲ出スノミとし余程  
癩に触ったとみえ、大家の時珍を相手に大見栄をきっている。東壁多病ニシテ親採り種へ試ルコ  
トヲ為サズ、故ニ其形状之解スルニ至リテ苟モ古人ノ筆頭ヲ騰動スルニ過ザルノミ。草木形状、  
王思義ガ三才図会ニ抛ル者十ニシテ七八、嗚呼王氏ガ物産ニ於ル、如何ゾ専門ナランヤ。ととば  
ちりは王思義に及び、専門に非ズシテ其コトヲキワメント欲スルハ、蠶者ノ物色ヲ談ズルガ如シ  
……と手きびしい。大和本草では、ナワシロイチゴをアシクダシと言っているが、悪しきを  
くだす意かという。またダレイッゴ(川辺、知覧)は生果を過食すれば病気になるから(ダレル  
カラ)だときいた。イチゴ属は、中国では夥しい種が知られ、半世紀も前に於て既に150種近  
くに達している。ナワシロイチゴもその中の一つで山東広東江西で広域に分布している。  
支那名も草揚莓子や茅莓(広州)その他多い。ナワシロイチゴを稀にヘビイッゴ(加世田)とも  
云うが和名ヘビイチゴ(支那名蛇莓)は別属で黄花を咲く。ピイッゴ(加世田)、イゲイッゴ  
(長島)などはイチゴ属の特徴の一つをトゲで表わす方言である。

5-19 ダンザンハ(コモチシダ) — 好んで断崖壁に群生して大形葉を垂下する常緑の大  
型のシダである。時には葉表面一面夥しい小苗(胎芽)ができる。4月若芽は帯紅色で殊に美し  
いものをハチジョウカグマ(タイウコンコモチシダ)としている。支那ではこの類を狗脊といい、  
オオカグマ(狗脊)、コモチシダ(東方狗脊)、ハチジョウカグマ(多子東方狗脊)と言っている。  
時珍曰、狗脊有二種一種根黒色如狗脊骨一種有全黄毛如狗形皆可入薬と。コモチシダには、  
次の様に多くの方言がきかれる。オイダヘゴ(伊作)、オナゴヘゴ(伊作)、ダンザヘゴ(日吉  
吹上、加世田、笠沙)、ダンザンハ(椎木)バクヨヘゴ、バクロウヘゴ(内布)、ガンタクサ  
(白川)、ゴンタヘゴ(永吉、和田、阿多、内布、益山)、カワヘゴ(大浦大木場)、ヤマドイノ  
ホロ、ヤマドイノシット(大浦)などで冬季牛の飼料にもなる。ダンザヘゴのダンザは、アナグ  
マ(タヌキ)のことでこのシダが多くの小苗をつけたさまを人をバカすタヌキなどの性質に見立  
てたのであろうか。バクロウというのは馬売買の際には仲介人が値ぶみを袖の中の手でひそかに  
なしたもので、それをだまし合いと見てこのシダの異様な姿を表現したのか。ゴンダヘゴは子  
苗を付した葉面を人の醜面にみたてたものか。カワヘゴは、河川の岸辺あたりの生育地に因んだ  
名であろう。ヤマドイノホロは山鳥の羽毛の意で葉状に由来した方言である。オナゴヘゴはこの  
シダが岸より下方へ垂れて群生している状況に基づいた名であろう。伊豆南部では、このシダに  
ヤマドリカクシの名があるという(倉田悟氏)。この名はまた、イヌガンソク、イノデ(島根)  
リョウメンシダ、ヤマドリセンマイ、サカゲイノデ(山口)などシダ類の方言名にもなっている。  
このシダの葉状をみて、羽毛の似たヤマドリでもかくれたらきっと見分けがつかないだろうとの  
奇抜な考えによるのであろう。

5-20) ヘチラカシ(ハイキビ, キシュウスズメノヒエ) — 方言は、匍い廻るの意で長い地下茎やほふく枝の節々より根をはり上方に茎を伸ばして繁殖するイネ科の雑草に付けた名称である。赤生木では、ヘツラカシといい、ガネグサ、ヤマメグサと同一物で水田の雑草を指している。ガネグサは、川がに釣りに子供らが遊びとして用いる名でハイキビもその一つである。ヤメメグサもハイキビ(鉄山など)、キシュウスズメノヒエ(益山など)で田の畦などにはい廻る草(内布など)だという。大浦では、ヘツラガイといい、たんぼの土手から中へ増える草で、戦後稲の早期栽培するようになってから著しく目立って増えた。茎はタケのように節があり、かめば甘いという。米の生産過剰は、皮肉にも作付減反、休耕田など思わぬ結果を招いたが、この休耕田は雑草の生育楽天地で水田一面足の踏み場もないほどキシュウスズメノヒエでおおわれてしまった所もある。この除草復旧のため農業試験場にまた一つ研究課題が増えた。ハイキビは新芽が硬くがっていてタケノコグサ(大浦など)ともいい、またウシコロシの名もある。水田で役牛の足に引かかるとこの名がついたという。一説にこの草は牛の好物であり、あまり多食して病死したためだというものもある(小湊)。ウシコロシ(時にウシコロ)は、オヒシバを指すこともあり(万世, 相星など)、ミゾソバをいうこともある(吹上町藤元)が、堀切山では、コガンピに当て、牛には食べさせないのだときいた。困みに、ウンマゴロシ(益山)というのがある。ドクダミに似た臭い草というからハンゲショウのことと思われる。ハンゲショウは小湊ではカワフズキといい「田んぼの土手にはえ一年中ある。馬は食べない」というのが有力な傍証となるだろう。ところでハイキビを何故ヤマメグサというか。この草がやたらにはびこるばかりで、目立った花実もつけない様子をオトコヤモメの身廻りの万事不行届で「蛆が湧く」というのに通わせたのであろうか。手入れの届かぬ荒田に多く生える草の意だろうか。

5-(21) ミツズシ(クマノミズキ) — クマノミズキは、山腹樹林中に見かける落葉樹で6月頃白花でおおわれた樹冠は遠望してすぐこの種類とわかる位特徴がある。葉は対生で裏細伏毛の為白色を帯びる。ミツズシ(堀切山, 笠沙町谷山など)と呼ばれるのは、切口から汁液が出るからと思われるが、ズシは何の意味か。切り離して考えてみたがわからない。調べてみるとミツズシはミズユスの縮まったものとわかった。大和本草に、ミズユス其木理ユスニ似たり……枝ヲ切レバ水出ツ四月殊ニ多シ切口ヨリ水滴ル異木ナリと云う。葉の裏でこすれば必ずかゆいので、ムシカカシバ(開聞町脇)とかムックイノク(笠沙町黒瀬)などともいわれる。

5-(22) ハマアサガオ(ハマヒルガオ) — 南薩通名のこの草はコガレグサとも云われる。海岸砂地に群生する。同属のコヒルガオも畑地などに見られる。別属のグンバイヒルガオは熱帯から亜熱帯の海岸植物で、吹上海岸でも稀に苗を発見するが花をみない。新川で採った苗を鉢に移し保護したが花をみず11月には枯死してしまった(1968)。鳥取海岸まであるらしい。海岸近い山野に時に群生し青紫色の花で人目をひくノアサガオも同属とされ小湊、笠沙方面に分布するが赤花はないようだ。近来の帰化というアメリカアサガオは1971年はじめて加世田の町はずれでみつかった。1947年に花を採集した細葉の小形アサガオは、1955年に万世で採集した果付の標本と共に、種名未定のままになっていたが、これはマメアサガオらしい(図参

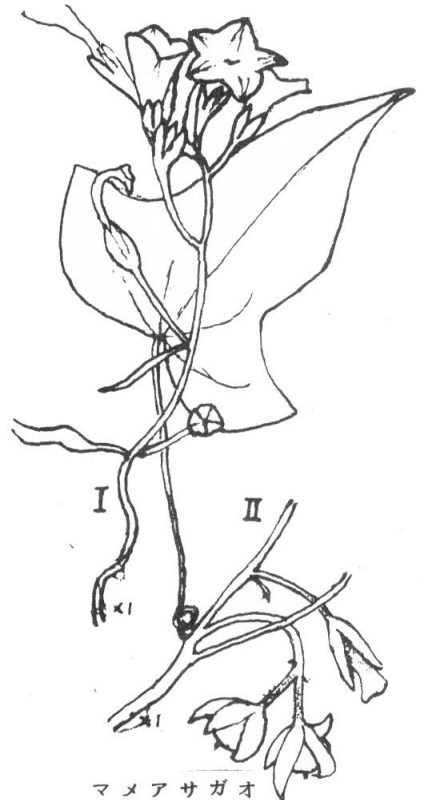


照)その後この種はどうなったか。近年道路拡張改修の為土砂の搬入と路肩袖の固定の為の芝付は、植物の分布をひろげることが多い。今まで見なかったウツボグサ、カワラナデシコ、ヤナギバヒメジョオン、コマツナギなどが1973年はじめて万世で見つかった。タチツメクサもシロツメクサに混入して道傍に多く花をつけている。外来種では、カナリークサヨシ数株も加世田の町でみつかった(72年)。さてヒルガオ科作物で有名なサツマイモは肥大した側根がイモであるが終戦直後は茎葉を食べた苦い苦しい経験を想い出す。茎葉を利用するのは、これも南方系のヨウサイ(アサガオナ)で空心菜とも中国では呼ばれている〔俗説(2)-163〕。北部朝鮮では野生ヒルガオ(メーサクと云)の根をきざんで飯にたき込んで食べると戦前きいた。さしずめヒルガオ飯といえよう。カライモ飯の原型と思えば不思議はない。邦書救荒植物集説P60に漢土ニテ此根ヲ煮食フ1説アリ又沖縄ニテモ蒸シ食フ方言節根ト呼フなどの記事がある。この小冊子は表紙に禁売買と印刷した85頁の仮とじ本である。(昭和23年発行家庭新書三巻附録(二)救荒植物集説抄には、全部で92頁(B6版相当)とある)。



(天然記念物のメゴ)

笠沙町赤生木で1956年に写す。  
 当時はこんな株が他に2~3株自生  
 していたが今はない。人物は筆者。



マメアサガオ

- I 1947年6月5日 加世田市白亀の踏切付近で採る。
- II 1955年9月19日 万世で採る。

1972年度採集種子植物目録

生物部

本年度採集した種子植物を、科別に分類し十甲をもってその採集地を区別した。ただし尾ヶ丘採集会では大浦一帯ヶ丘園コースで採集したものを尾ヶ丘園付近で採ったものと同ーらんに記入してある。科の配列は、双子葉綱中花綱(1~39)、合弁花綱(40~61)、単子葉綱(62~67)とした。

	科名	植物名	場所		尾ヶ丘 大29	八幡尾 6.25	野増谷 8.11~13	刈畑 ハツバシ 8.25	倉峰山 10.22	八重山 12.17	池袋 1.27
			月	日							
1	マキ	ナギ				+					
2	ヤマモモ	ヤマモモ					+				
3	ブナ	コジイ					+				
		シラカシ					+				
		ウラジロガシ			+			+			
		マチバシ						+			
		アカガシ						+			
4	クワ	コナゾ					+				
		ホンバヤシビワ			+						
5	イラクサ	カラムシ						+			
		ナガバヤブマオ						+			
		ヤブマオ			+			+			
		ヤナギイチゴ									+
		コケミズ			+						
		イワガネ							+		
		メヤブマオ							+		
コアカソ					+		+				
6	ヤマモガシ	ヤマモガシ								+	
7	ヤドリギ	ヒノキバヤドリギ						+			
8	カンアオイ	サツマアオイ						+			
9	(クマハスグサ) クマデ	オオイヌタデ				+					
		ミズヒキ						+		+	
10	ヒユ	ヤナギイチゴ									
11	ヤマゴボウ	ギシギシ						+			
		コウシュヤマゴボウ						+			

	科名	場所		電々五 4.29	八瀨尾 6.25	野間岳 8.11-13	川辺町 ハゲノ山 8.25	金峰山 10.22	八雲山 12.17	池袋 1.21'93
		植物名	月日							
12	ナデシコ	シロバナマンチマ		+						
13	キツネノボタン	ボタンヅル					+			
		ヒメウス								+
14	ツツラフジ	コウシエウウマク				+				
15	モクレン	サネカズラ				+				
		シキミ				+				
16	クスノキ	カゴノキ				+				+
		ホソバタゴ		+		+				
		タゴ				+				
		シロダモ				+				
		ヤブニッケイ							+	
		アオモジ			+		+			
		ニッケイ								+
		カタクギノキ					+			
17	アブラナ	イスガラシ				+				
18	ユキノシタ	イワガラミ			+					
19	バラ	リンボク							+	
		バクチノキ				+				
		ホウロクイチゴ		+						
		カマツカ				+				
		マルバシヤリンバイ		+						
		キジムシロ				+				
		ダイコンソウ			+					
		フユイチゴ				+	+			+
		ユスラウメ(載)				+				
		ナガバモミジイチゴ								+
20	マメ	スズメノエンドウ		+						
		カスマグサ		+						
		ヤハズソウ				+				
		カワラケツメイ				+				
		ネコハギ			+					
		クス				+				
		ミヤコグサ			+	+				+



	科名	植物名	場所(月・日)							
			尾ヶ丘 4.29	八瀬尾 6.26	野間岳 8.11~13	河辺町 ハナトシ 8.25	金峰山 10.22	八重山 12.17	池底 1.21/73	
35	ヤマシ	キブシ(ナンバン)	+	(株)		+	(株)			
36	ジンチョウゲ	コショウノキ	+							
37	アオバナ	コマツヨイクサ ミスサマソウ			+	(株)				
38	セリ	オオバコドメスサ ウマノミソバ			+					
39	ミスギ	アオキ ハナイカサ			+	(株)				+
40	イチヤクソウ	イチヤクソウ サクラツツジ			+	(株)				
41	ツツジ	アセビ ネジギ オンツツジ ジャシヤンホ					+			
42	ヤブコウジ	ツルコウジ タイミンタケバナ イヌセンリョウ					+	+		
43	サクラソウ	オカトラノオ モロコシソウ ギンレイカ			+	(株)	+	(株)	+	(株)
44	ハイノキ	クロキ				+		+		
45	エゴノキ	エゴノキ			+					
46	モクセイ	ネズミモチ				+				
47	フジウツギ	コフジウツギ			+		+			+
48	リンドウ	ツルリンドウ アケボノソウ マンアリ							+	(株)
49	ヨウキクツウ	サカキカツラ トキワガモメツル ライオウカツラ			+	(株)			+	(株)
50	ムラサキ	キシヤノキ			+	(株)				
51	クマツツラ	ムラサキシキア オオムラサキシキア					+			+

科名	植物名	場所 (H1)	竜ヶ丘	八瀬尾	野川	川辺野	金海	八重山	池底
			4.29	5.25	8.11~13	8.25	10.22	12.17	1.21 '73
52 シソ	ハマクサギ		+		+	(葉)			
	キランソウ		+	(葉)					
	トウバナ		+	(葉)					
	アキノタムラソウ			+	(葉)				
	ツルニガフサ				+	(葉) +			
53 ナス	ハマカボウズキ						+		+
	イガボウズキ						+		
54 イワタバコ	イワタバコ				+	(葉)			
55 キツネノマゴ	キツネノマゴ				+				
56 ハエドクソウ	ハエドクソウ					+	+		
57 アカネ	サツマイナモリ				+		+		
	アカネ			+					
	サツマルミノキ						+		
	ギョクシニカ				+	(葉)			
	ハシカクサ					+	(葉)		
58 スイカツラ	ニワトコ					+		+	
	ハクサンボク					+			
	ハマニンドウ						+	+	
	キタチニンドウ			+	(葉)				
	スイカツラ		+	(葉)					
59 くり	オオカラヌマリ			+	(葉)				
	アマチャヅル					+	(葉)		
60 キキョウ	ツルニンジソ				+				
	イヌムシロ				+				
61 キク	キョウウハズマ				+				
	ヌマタイコン							+	(葉)
	ノゲシ		+	(葉)					
	タンドロギク					+	(葉)		
	ノジギク								+
	シユウゲン					+			
	ウスベニガサ		+	(葉)					
	ハマベノギク		+	(葉)					
	カンフヒソウ				+				

科名	植物名	場所(母田)							
		最立 4.29	八瀬尾 6.25	野洲山 8.11~13	川辺野 ハゲト山 8.25	金峰山 10.22	八重山 12.17	池底 1.21 '73	
62 イネ	ホウキギク			+					
	クマノギク			+(花)					
	トキソウ			+(花)					
	メナモミ			+(花)		+			
	クサヨシ		+(花)						
	ササクサ			+					
	メカルナギ			+(花)					
	キツネガヤ		+						
	スズメノコビエ	+(花)							
	カニツリスサ	+(花)							
	コバノウシノミルバエ			+(花)					
	ヌカキビ					+			
	ホソムギ			+(花)					
	ミノホロ	+(花)							
	ヒロハウシノケサ	+(花)							
	ササキビ	+							
	トビシガラ	+(花)							
	シバ		+						
63 カヤツリスサ	ナキリスゲ					+			
	カヤツリスサ		+(花)	+(花)					
	ゴゴノカヤツリ			+(花)					
64 ッエクサ	ヤブミョウガ				+(果)	+(果)			
	ノヒメユリ				+(花)				
65 ユリ	キヨズミキハクシ			+					
	コオニユリ		+						
	ゴヤブラン			+					
	ヤマホトトギス			+					
	ハマサルトリイバラ						+	+(花)	
	サツマサンキライ								
	ソクシンラン	+(花)							
	キキョウラン	+(花)							
	66 ヤマノイモ	オニトコロ				+			
		カエデトコロ		+	+(花)	+			

	科名	場所 (日付)	尾ヶ丘	八瀬尾	野間岳	川辺町	金峰山	八重山	池底
67	ラン	ヤマノイモ ハカソウウ シロラン ガンセキラン ナツエビイ	4.29	6.25	8.11~13	8.25	10.22	12.17	1.21/23
				+	+	+			
				+					
					+				
					+				





鹿児島県加世田高等学校生物部誌 まのせ10号

発行日：1974年9月1日

発行者：鹿児島県加世田市川畑

加世田高校生物部

編集者：南 洋 子

印刷：鹿児島市城山町12-17

明るい窓社(TEL. 22-8335)

